

第4章 名詞と連体修飾語

名詞（句）は、主に主語や目的語として機能する。この章では、名詞と連体修飾語について、その構造と用法を中心に述べる。

4.1. 名詞

4.1.1. 名詞クラス

バンツー諸語の名詞は、一般に、そのクラス分類で知られるが、マテング語の名詞は19のクラスに分れている。それぞれのクラスには独自の接頭辞があり、名詞が属するクラスは、概ねその接頭辞によって示される。それぞれの名詞クラス接頭辞は表1に示したとおりである。

<表1：名詞クラスの名詞クラス接頭辞>

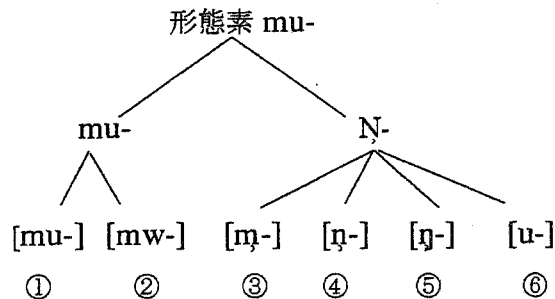
名詞クラス	名詞クラス接頭辞	
	①	②
1	mu-	N- (u-)
1α	φ-	
2	ba-	a-
2α	aka-	
3	mu-	N- (u-)
4	mi-	
5	li-	
6	ma-	
7	si-	ki-
8	hi-	i-
9	n- (in-, φ-)	
10	n- (in-, φ-)	
11	lu-	
12	ka-	
13	tu-	
14	u-	
15	ku-	
16	pa-	
17	ku-	
18	mu-	N- (u-)
20	gu-	

名詞クラスは、マテング語の文法呼応の基盤となるものである。バンツ語の名詞クラスには、比較のためにバンツ祖語を基に一定のクラス番号がつけられているが (Guthrie 1967b:92, Welmers 1973:165, Meeussen 1967:97 他), 本論文ではそれに従って各名詞クラスに番号を付ける。

①と②の区別がある場合には、①が基底形で、②はその異形態である。②の異形態は、子音で始まる2音節以上の名詞語幹に付く場合に現われる。①の形で現われるのはそれ以外の場合、すなわち、母音で始まる名詞語幹、および1音節の名詞語幹に付く場合である。

表中のNは音節主音的鼻音を表わす。N-という異形態を持つ、1, 3, 18クラスの名詞クラス接頭辞 mu- については、環境がさらに細かく区別され、現われ方が異なってくる。その形態とそれぞれが現われる環境は、以下のようにまとめられる。

<図1: 形態素 mu- の異形態とそれぞれが現われる環境>



- ①: 1音節の名詞語幹に付く場合
- ②: 語幹の音節数に関係なく、母音で始まる名詞語幹に付く場合
- ③: 子音 p, b で始まる2音節以上の名詞語幹に付く場合
- ④: 子音 t, l, s, d₃ で始まる2音節以上の名詞語幹に付く場合
- ⑤: 子音 k, g, h で始まる2音節以上の名詞語幹に付く場合
- ⑥: m, n, j, ŋ で始まる2音節以上の名詞語幹に付く場合

名詞クラス接頭辞の mu- は、後接する語幹が1音節の場合には、そのままの形で現われる (①)。音節数に関係なく、母音で始まる語幹に付く場合には、形態素の境界で母音が重なるので、mu- の母音は半母音化して現われる (②)。鼻子音以外の子音で始まる2音節以上の語幹に付く場合には、mu- の母音は脱落し、残った鼻子音 m は音節主音的鼻音として現われる。音節主音的鼻音は後ろに続く子音と同調音点になる。ただし、後ろに続く子音が/h/の場合には ŋ- で現われる (③~⑤)。鼻子音で始まる2音節以上の語幹

に付く場合には、mu- の子音が脱落し、u- で現われる (⑥)。なお、18 クラスの名詞クラス接頭辞は名詞語幹ではなく名詞に付加されるので (後述)、③～⑥の「名詞語幹」が「名詞」になる。①②のような環境は 18 クラスには起こり得ないが、mu-, mw- という現われ方をする場合については、場所クラスの項で述べる。

名詞は「名詞クラス接頭辞—名詞語幹」という構造から成る。名詞クラスを決定するのは名詞語幹ではなく名詞クラス接頭辞である。名詞クラス接頭辞が付加されることによってはじめて、属する名詞クラスが特定される。従って、ひとつの名詞語幹が、異なる名詞クラス接頭辞をとることによって、いくつかの名詞クラスに属することも可能である。単数形と複数形もその例のひとつである。単数形と複数形は、それぞれ別の名詞クラス接頭辞をとり、別のクラスに属している。それらは以下のような対になる。() 内はそれぞれの名詞クラスとその名詞クラス接頭辞である。

単数		—	複数		
mû-ndu	(1, mu-)	—	bâ-ndu	(2, ba-)	「人」
tífíla	(1a, φ-)	—	áka-tífíla	(2a, aka-)	「視聴覚障害者」
ń-kɔŋgu	(3, mu-)	—	mí-kɔŋgu	(4, mi-)	「木」
lí-himba	(5, li-)	—	má-himba	(6, ma-)	「ライオン」
sí-ndu	(7, si-)	—	hí-ndu	(8, hi-)	「物」
ŋ-gôndi	(9, n-)	—	ŋ-gôndi	(10, n-)	「豆」
lú-teta	(11, lu-)	—	ín-deta	(10, in-)	「体側」
ká-losi	(12, ka-)	—	tú-losi	(13, tu-)	「小川」
kú-bòku	(15, ku-)	—	má-bòku	(6, ma-)	「腕」
gú-libu	(20, gu-)	—	mí-libu	(4, mi-)	「岩」

かつては各クラスに意味的な共通点があったとも考えられるが、少なくとも現在ではその特定は困難である。とはいえ各クラスにいくらかの傾向は見られるので、次にその傾向をあげる。ここで言う「傾向」とは、そのクラスに含まれているものの中で際立っているもの、という意味であって、そのクラスに含まれている名詞の特色を総括的に捉えているわけではない。ほとんどのクラスに各種のものが混在している。

① 1—2クラス

このクラスには、人物を表わす名詞のみが属する。親族名称もこのクラスに属するが、親族名称には独特の体系が見られるので、ここでは親族名称とそれ以外の名詞を分けて見

ていくことにする。

◆ 親族名称以外

単数形には1クラスと1aクラス、複数形には2クラスと2aクラス、とそれぞれ2とお
りある。そのうち、単数形が1クラスのクラス接頭辞mu-(N-)、複数形が2クラスのクラ
ス接頭辞 ba-(a-)をとる対がもっとも基本的であると思われる。

1-2

mûndu - bându	「人」
mwénehi - bénehi	「住人」 (<mu- enehi ba-enehi)
mwíhi - bíhi	「泥棒」 (<mu- ihi ba- ihi)
mwanápundi - banápundi	「生徒」 (<mu-anapundi ba-anapundi)
ŋkôsi - akôsi	「友人」
ŋhabi - áhabi	「魔術師」
ŋganga - áganga	「伝統医」
ŋtâmu - atâmu	「病人」
ŋdônggu - álônggu	「仲間, 親戚」
ŋsêdza - asêdza	「年老いた人」
ŋbehi - ábehi	「狩人」
ŋpípu - apípu	「怠け者」

動詞や形容詞語幹に1クラスと2クラスの名詞クラス接頭辞を付けることで「動詞が表
わすことをする人」あるいは「動詞・形容詞が表わす状態の人」を意味する名詞になる。

ŋkwaba - ákwaba	「歩けない人」	cf. -kwáb-	「這う」
ŋkolônggu - ákolônggu	「成功者」	cf. -kolônggu	「大きい」
ŋhaguɔ - áhaguɔ	「貧しい人 (服も持っていない人)」		
	cf. -hágul-	「服がないほど貧しい」	

民族名や地名などにこれらの名詞クラス接頭辞をつけて、「～人」、「～出身の人」と
いう意味になる。その際、/ma/で始まる3音節以上の民族名や地名に付く場合には、名詞
クラス接頭辞の後ろに挿入母音として /a/ が入る (3.3.2.参照)。その結果、単数形の接
頭辞mu-は mwa-で現われる。複数形の接頭辞 a-の場合には、挿入母音と融合するため結

果的に/a/のままで現われる。

mu-maténǵo	→	mu-a-maténǵo	→	mwámaténǵo	「マテンゴ人」	
				cl.2 á-maténǵo		
mu-masâi	→	mu-a-masâi	→	mwamasâi	「マサイ人」	
				cl.2 a-masâi		
mu-malâwi	→	mu-a-malâwi	→	mwamalâwi	「マラウイ人」	
				cl.2 a-malâwi		
cf. mu-manda	→	umânda	「マンダ人」	cl.2 a-mânda		
mu-pakjûsa	→	upakjûsa	「ニャキューサ人」	cl.2 a-pakjûsa		
mu-namíbia	→	unamíbia	「ナミビア人」	cl.2 a-namíbia		

以下は単数形が 1a, 複数形が 2a の名詞クラス接頭辞をとる対の例である。ここには、名詞語幹（として扱われている部分）の最初の音節が他の名詞クラス接頭辞と同音のもの、つまり、/ka/, /n/, /ba/, /ki/などの音節で始まっているものが含まれている。また、名詞クラス接頭辞をとらないスワヒリ語からの借用語もここに含まれる。それ以外のものも、少数ではあるが含まれる。

1a-2a

kamwáli - ákacamwáli	「若い娘」
kalónǵosi - ákakalónǵosi	「指導者」
kahôsu - ákakahôsu	「何も持っていない人」
mbômba - ákambômba	「女」
ngalôla - ákanǵalôla	「視覚障害者」 cf. -lôl- 「見る」, nga (否定語)
bâmbu - ákabâmbu	「チーフ」
kímumûta - ákikímumûta	「ろうあ者」
tífila - ákatífila	「視覚障害者」
mwaîmu - ákamwafimu	「先生」 (＜スワヒリ語)
dakitáli - ákadakitáli	「医者」 (＜スワヒリ語)
dzilâni - ákadzilâni	「隣人」 (＜スワヒリ語)

1a クラスの名詞クラス接頭辞は ϕ -であるから、「名詞語幹として扱われている部分の

最初の音節」というのは、単数形の語頭音節ということになる。しかしながら、実際にこれらが名詞語幹であるかどうかは明らかではない。例えば、*kamwâli*「若い娘」であれば、本来は *ka-mwali*「12 クラスの名詞クラス接頭辞一名詞語幹」であった可能性もある。ただし、文法呼応を見ると、この名詞は1クラスとして振る舞うので、少なくとも現在では、*kamwâli* が名詞語幹として扱われ、単数形の構造は「 ϕ -*kamwali*」であると考えられる。ただし、*mwaîmu*「先生」のような場合は判断が難しい。これはスワヒリ語からの借用語で、スワヒリ語では接頭辞 *m̩*-と語幹 *-alimu*で構成されている。マテンゴ語でも *mu-*が1クラスの接頭辞であることから、文法呼応からでは *mwaîmu* が名詞語幹として扱われているのかどうかの判断はできない。*mwâlimu* が名詞語幹として扱われているのではなく、語幹 *-alimu*に、単数形では1クラスの名詞クラス接頭辞 *mu-* が付き、複数形ではその上から2aクラスの名詞クラス接頭辞が付加されている、つまり、1a-2aの対ではなく、1-2aの対であるという可能性もある。しかしながら、以下に示す性別を表わす名詞と親族名称以外では、1-2aの対が他に見られないことから、ここでは、*mwâlimu* が名詞語幹として扱われていると判断し、1a-2aの対とした。

性別を表わす以下の名詞は、単数形が1クラス、複数形が2aクラスの接頭辞をとる。

1-2a

<i>mwânalomi - âkanâlomi</i>	「男」	(< <i>mu-analomi - aka-analomi</i>)
<i>ŋkɔmbu - âkakɔmbu</i>	「若い男」	
<i>ŋsɔŋgɔɔ - âkasɔŋgɔɔ</i>	「男の子」	
<i>ŋsíkani - âkasíkani</i>	「女の子」	

◆ 親族名称

親族名称は、世代によって接辞の付き方が異なる。自分よりも下の世代および目下に対する親族名称の場合、基本的には、単数形は1クラス、複数形は2クラスが用いられる。ただし子音で始まる2音節以上の名詞語幹の場合、つまり単数形の名詞クラス接頭辞が音節主音的鼻音で現われている場合には、対となる複数形に2クラスと2aクラスのいずれの名詞クラス接頭辞を用いることもできる。その場合に意味の差は見られない。

1-2 / 2a

<i>mwâna - bâna</i>	「子供」
<i>mwîpwa - bîpwa</i>	「(おじからみた)甥, 姪」
<i>ŋhéŋgane - ahéŋgane/âkahéŋgane</i>	「(おばからみた)甥, 姪」

únunɔ̀na - ánunɔ̀na/ ákanúnɔ̀na	「年下の異性のきょうだい」
ńsokôlo- ásokôlo/ ákasokôlo	「孫」

自分より上の世代にあたる親族名称の場合には、単数形の接辞に a- が用いられる。対になる複数形には 2a クラスの名詞クラス接頭辞が用いられる。

2-2a

ahéngolo - ákahéngolo	「父親および父親の男兄弟（名称）」
atâti - ákatâti	「父親および父親の男兄弟（呼称）」
anôngolo - ákanôngolo	「母親および母親の姉妹（名称）」
amâbu - ákamâbu	「母親および母親の姉妹（呼称）」
ánidzadzã - ákanídzadzã	「母親の兄弟」
ániheŋga - ákaníheŋga	「父親の姉妹」
ahôku - ákahôku	「祖父」
ambûdzã - ákambûdzã	「祖母」
ánihjãla - ákaníhjãla	「夫の親」

単数形の接辞に a- が用いられる場合には、文法呼応もすべて 2 クラスの名詞として振る舞う。以下は -áŋgu 「私の」という所有形容詞を後続させた例である。ba- は 2 クラス、dzu- は 1 クラスに呼応した接辞である (4.2.2.1. 参照)。

ahóku bāngu (ba-áŋgu)		「私の祖父（単数）」
cf. ńsokólo dzwāngu (dzu-áŋgu)		「私の孫（単数）」
ákahóku bāngu (ba-áŋgu)		「私の祖父たち（複数）」
ásokólo bāngu (ba-áŋgu)		「私の孫たち（複数）」

このことから、単数形に用いられる接辞 a- は、1 クラスの接頭辞に a- というバリエーションがあるのではなく、これらの名詞が 2 クラスに属していると考えられるべきであろう。

自分と同世代の親族名称の場合は、単数形に 1 クラスと 2 クラスのいずれを用いることも可能である。2 クラスが用いられる場合には尊敬の意味が込められる。単数形が一定ではないこれらの名詞の複数形には、2 クラスの名詞クラス接頭辞と 2a クラスの名詞クラス接頭辞の両方が同時に付加される。

1 / 2-2a

n̄beli/ ábeli - ákaábeli	「年上の同性のきょうだい」
n̄hanu / áhanu - ákaáhanu	「妻」
n̄domi / álomi - akaálo mi	「夫」
n̄dǎmu / álǎmu - ákaálǎmu	「きょうだいの配偶者, 配偶者のきょうだい」
n̄twási / átwási - ákaátwási	「妻の姉妹の夫」
n̄gandza/ ágandza - ákaágandza	「夫の兄弟の妻」
n̄hasa / áhasa - ákaáhasa	「女からみた兄弟」
n̄dombu/ álombu - ákaálombu	「男からみた姉妹」

② 3-4 クラス

ほとんどの木がこのクラスに含まれる。他にも植物が多く含まれている。

n̄pengu - mípengu	「マホガニー」
mwáu - mjáu	「アカシア」 (< mú-áu - mí-áu)
n̄dóngalongu - milóngalongu	「サトウキビ」
n̄hâhani - mihâhani	「ヘチマ」

数の「4」と「5」を表わす名詞は3クラスに属する(4.2.3.参照)。

n̄sesi	「4」
n̄hanu	「5」

4クラスは「巨大なもの」を表わす20クラスの対にもなる。これに関しては20-4クラスで述べる。

③ 5-6 クラス

動物や鳥, 昆虫, 木の実, 農産物, 植物の部位名の多くがこのクラスに属する。また身体部位も見られる。少数であるが, 動詞から派生した名詞もある。数の「10」を表わす名詞もここに属する。

lípangu - mápangu	「イボイノシシ」
liṅwína - máṅwĩa	「ワニ」

likôṅgobu - mákoṅgobu	「カラス」
lipâhi - mapâhi	「イナゴ, バッタ」
limbôa - mambôa	「木の実の種類」
lisômba - masômba	「ひまわり」
lîdzola - mádzola	「樹皮」
lipâmbála - mapâmbála	「肩甲骨」
líheṅgu - máheṅgu	「仕事」 cf. -héṅg- 「働く」
líkomi - mákomi	「10」 likomi límu 「10」 mákomi gábeli 「20」

不可算名詞の多くが6クラスに属している。

máhuta	「油」
mandôndu	「小雨」
mangwâpa	「脇毛」
málaṅgu	「知恵」
máligu	「呪いの言葉」 cf. -líg- 「呪いの言葉をはく」

④ 7-8クラス

これらのクラスのクラス接頭辞は、1音節語根あるいは母音で始まる語根に付く場合には、単数形がsi-, 複数形がhi-, それ以外の語根に付く場合には、単数形がki-, 複数形がi-の形で現われる。動物や道具が多く含まれている。言語名は7クラスに属する。5-6クラスに属している動物には、大きいものも小さいものもあるが、このクラスに属する動物は小動物に限られる。

sîndu - hîndu	「物」
sóbi - hjóbi	「採血用の角」 (< sí-obí - hí-obí)
kíkolakolu - íkolakolu	「家庭用品」
kikwânda - ikwânda	「手斧」
kibêga - ibêga	「土鍋」
kíbelá - íbelá	「岩ダヌキ」
kíníma - íníma	「コウモリ」
kindendeûle	「ンデンドウレ語」

言語名を表わす場合は、民族名や地名などに7クラスの名詞クラス接頭辞がつく。その場合、語頭音節が/ma/の3音節以上の固有名詞であれば、名詞クラス接頭辞の後ろに挿入母音として /a/ が生じる (3.2.2.参照)。その結果、接頭辞は /sa-/で現われる。

kí-maténǵo	→	sí-a-maténǵo	→	sámaténǵo	「マテング語」
kí-masâi	→	sí-a-masâi	→	sámasâi	「マサイ語」
cf. kí-manda	→	kimânda			「マンダ語」
kí-pakjûsa	→	kípakjûsa			「ニャキューサ語」
kí-dzápani	→	kidzápani			「日本語」

⑤ 9-10 クラス

かなり雑多に入り交ざっているが、抽象名詞、大きい動物などが比較的多く属している。9クラスと10クラスの名詞クラス接頭辞として表1に n-, in-¹, φ- (接辞がつかないもの) をあげたが、これらの間に意味の違いはない。

ngólabakeka - ngólabakeka	「話し方」
ngôndu - ngôndu	「戦い」
ndémbu - ndémbu	「象」
púmbu - púmbu	「ウシカモシカ, ヌー」
ípama - ípama	「動物, 肉」
imbêla - imbêla	「紐でまわすコマ」
tíbili - tíbili	「木釘」
sôma - sôma	「ビーズ」

9クラスと10クラスは、名詞クラス接頭辞が同形であるため、名詞自体は単数形(9クラス)と複数形(10クラス)の区別がつかない。しかしながら、これらはいくまでも別々のクラスに属しており、異なる文法呼応をする。以下は所有形容詞 -ángu 「私の」を続けた例である。dzi-は9クラス、hi-は10クラスに呼応する接辞である。

¹ in-の /i/ は冒頭母音 (4.1.2.2.参照) という別の要素であり、正確には、i-n- (冒頭母音-名詞クラス接頭辞) となる。ただし、ここでは境界を示さずに用いる。

ĩngobu dzãngu	(dzi-ãngu)	「私の服 sg.(9)」
ĩngobu hjãngu	(hi-ãngu)	「私の服 pl.(10)」

⑥ 11 クラス

抽象名詞や集合名詞など、単複の対立のない名詞が多く含まれている。動詞から派生した抽象名詞もある。

lúhala	「知恵」		
lúlambápaḥi	「飢餓」		
lúgɔnu	「眠気」		
luhôm̄bi	「土」		
lútahu	「よだれ」		
lúdʒɔgɔpu	「恐れ」	cf. -dʒɔgɔp-	「怖がる」
lúhjɔmu	「悲しみ」	cf. -hjóm-	「悲しむ」

可算名詞の場合には単数形を表わし、対になる複数形は10クラスである。

lúhandzu - hãndzu	「薪」
lupêsi - mbêsi	「ヒョウタンでできた柄杓」

⑦ 12-13 クラス

ka-, tu- は指小辞で、この接頭辞が付加されると、「小さい～」の意になる。他のクラスに属している名詞の名詞クラス接頭辞を、ka-, tu- と交替させることで、12-13 クラスの名詞になる。

katôm̄bi - tutôm̄bi	「丘」	cf. li-tôm̄bi - ma-tôm̄bi	「山 (5-6)」
kátɛngu - tútɛngu	「ブッシュ」	cf. kí-tɛngu - í-tɛngu	「森 (7-8)」
kákokêla - túkokêla	「小さい水路」	cf. lúkokêla - ŋgokêla	「水路(11-10)」

ただし、名詞が2音節の場合には、他のクラス接頭辞を残したまま12-13クラスの接頭辞が付加される。その際、複数形を表わす場合にも、tu-は単数形の名詞に付加される。

ká-mwana - tú-mwana	「赤ちゃん」	cf. mu-ana - ba-ana	「子供(1-2)」
ka-sêpu - tu-sêpu	「小さいふるい」	cf. sêpu - hjêpu	「ふるい(7-8)」

⑧ 14 クラス

抽象名詞がほとんどである。特に、動詞や形容詞から派生したものが多く、具体名詞の場合も不可算名詞のみである。

ugwêmbi	「地ビール」		
úlumi	「霧」		
ubîni	「痛み」	cf. -bîn-	「痛い」
údzîpi	「短いこと」	cf. -dzîpatil-	「短くなる」
úhakau	「悪」	cf. -hakau	「悪い～」
úbăba	「苦み」	cf. -báb-	「苦い」
utópeu	「重さ」	cf. -tóp-	「重くなる」
unáŋau	「夜明け」	cf. -náŋan-	「明るくなる」
úsókó	「小さいこと」	cf. -sókó	「小さい」
ulâsu	「長さ, 高さ」	cf. -lâsu	「高い, 長い」
úkolônggu	「大きさ」	cf. -kolônggu	「大きい」

⑨ 15 クラス

一部の身体名称を除けば、このクラスはすべて「～すること」という、動詞を名詞化させたものである。身体名称の場合には単数形を表わし、対の複数形は6クラスに属する。

kúboku - máboku	「腕」		
kúgolu - mágolu	「脚」		
kúlema	「耕すこと」	cf. -lém-	「耕す」
kúkwandula	「引っかくこと」	cf. -kwándul-	「引っかく」

⑩ 16, 17, 18 クラス

これらのクラスは「場所クラス」と呼ばれるものである。他のクラスに属している名詞に場所クラスの名詞クラス接頭辞がつけられることによって、新たに場所クラスに属することになる。同時に、名詞には以下のような意味がそれぞれ付加される。

16 クラス	pa-	「～の場所, 今いる～」
17 クラス	ku-	「～のあたり, ～へ」
18 クラス	mu- (N-/ u-)	「～の中」

場所クラスのクラス接頭辞は、名詞クラス接頭辞を交替させるのではなく、他の名詞クラス接頭辞を残したまま、更に付加される。

pa-míhu	「顔（目のあるところ）」	cf. míhu (má-ihu)	「目(6)」
ku-míhu	「面の前側（目のあるほう）」		
u-míhu	「目の中」		
pa-kalêla	「小川で」	cf. ka-lêla	「小川(12)」
ku-ŋhâhani	「ヘチマがあるあたり」	cf. ŋ-hâhani	「ヘチマ(3)」
mu-lúhăgi	「皿の中」	cf. lú-hăgi	「皿(11)」

ただし「下」, 「上」, 「前」, 「後ろ」などは、他のクラス接頭辞を付けずに、場所クラスの名詞クラス接頭辞が語幹に直接接辞される。これらの語幹に場所クラスのクラス接頭辞以外を付けることはできない。また pându「場所」も場所クラスの接頭辞が語幹に直接接辞されているが、この16クラスのクラス接頭辞 pa-を17クラスや18クラスの名詞クラス接頭辞²と交替させることはできない。

páhi	pa-hí	「下, 底, 床(16)」
kúhi	ku-hí	「下側, 下のほう(17)」
palóngi	pa-longí	「前(16)」
kulóngi	ku-longí	「前方(17)」
pându	pa-ndu	「場所(16)」

場所クラスの接頭辞が付加される際、接頭辞の後ろに挿入母音が入る (3.3.2.参照)。

pa-kitêu	→ pa-i-kitêu	→ pikiteu	「椅子の上(16)」
		cf. ki-têu	「椅子(7)」
pa-lúhũka	→ pa-u-lúhũka	→ pulúhũka	「軒下で(16)」
		cf. lu-hũka	「軒下(11)」

² mu-ndu「人」は、1クラスの名詞クラス接頭辞+語幹 ndu であって、18クラスとは無関係である。

ku-kibêga	→	ku-i-kibêga	→	kwikibêga	「土鍋あたり(17)」
				cf. ki-bêga	「土鍋(7)」
ku-lúbandza	→	ku-u-lúbandza	→	kulúbandza	「中庭あたり(17)」
				cf. lú-bandza	「中庭(11)」
mu-kíteleku	→	mu-i-kíteleku	→	mwikíteleku	「料理鍋の中(18)」
				cf. kí-teleku	「料理鍋(7)」
mu-lúhăgi	→	mu-u-lúhăgi	→	mulúhăgi	「皿の中(18)」
				cf. lú-hăgi	「皿(11)」

ただし、母音が挿入されるのは名詞クラス接頭辞の前だけであって、名詞クラス接頭辞のつかない名詞の前に場所クラスの接頭辞が付加される場合には、母音は挿入されない。

ku-sindânu	→	kusindânu	「針のあたり」	φ-sindânu	「針(9)」
mu-sindânu	→	ɲsindânu	「針の穴の中」		
ku-semusêmu	→	kusemusêmu	「泉のあたり」	φ-semusêmu	「泉(9)」
mu-semusêmu	→	ɲsemusêmu	「泉の中」		

16クラスは場所だけではなく、時を表わす名詞をつくることもできる。その場合には、「～の時に」という副詞的な機能をする。

pikipêpu	「寒い時期に」	cf. kipêpu	「寒さ(7)」
pulukêla	「午前中に」	cf. lukêla	「朝(11)」

◆ 固有名詞に付加される場合

16, 17クラスの名詞クラス接頭辞は、地名を表わす固有名詞にも付加される。16クラスは発話者がその場にいるとき、17クラスは発話者がその場所にいないときに用いられる。これらが固有名詞に付加される場合に、一般名詞に付加されるのとは異なる振る舞いをすることがある。

名詞語頭の音節が / li / の場合には、16, 17クラスの名詞クラス接頭辞が付くと、その名詞語頭の音節は脱落する。

ku-likonde	→	kúkonde	「リコンデ(地名)へ」
ku-litêmbô	→	kutêmbô	「リテンボ(地名)へ」

ku- litûhi	→	kutûhi	「リトゥヒ (地名) へ」
pa- likonde	→	pákonde	「ここリコンデ (地名) で」
pa- litêmbɔ	→	patêmbɔ	「ここリテンボ (地名) で」
pa- litûhi	→	patûhi	「ここリトゥヒ (地名) で」

この規則は、一般名詞には適用されない。ただし、「畑」を表わす5クラスの名詞 litûhi は例外で、16, 17 クラスの名詞クラス接頭辞が付加される場合には、5クラスの名詞クラス接頭辞 li- が脱落する。これは、地名の固有名詞に同音の litûhi があり、この語頭音節の /li/ が消えることに影響されていると思われる。

ku- li-tûhi	→	kutûhi	「畑 (5) へ」
pa- li-tûhi	→	patûhi	「畑 (5) で」
cf. ku- lí-hengu	→	kwílihengu	「仕事 (5) へ」

3音節以上で語頭音節が /ma/ ³ の地名や国名などの固有名詞に付加される場合には、16, 17 クラスの接頭辞と固有名詞の間に母音挿入が生じる。ただし、16 クラスの場合には、接頭辞の母音/a/に融合されるため、音声的には現われない。

ku-makambâko	→	ku-a-makambâko	→	kwamakambâko	「マカンバコ (地名) へ」
ku-malawi	→	ku-a-malawi	→	kwamalâwi	「マラウィ (国名) へ」
cf. ku-pândza	→	kupândza	「ニャンザ (地名) へ」		
ku-namíbia	→	kunamíbia	「ナミビア (国名) へ」		
ku-mbênga	→	kumbênga	「ンビンガ (地名) へ」		
ku-mologôlo	→	kumologôlo	「モロゴロ (地名) へ」		
ku-dzápani	→	kudzápani	「日本へ」		

³ただし、次の2つは、語頭の音節が/na/であるにも拘わらず、名詞クラス接頭辞の後ろに挿入母音が生じる。このような例は、以下の2つしか見つかっていない。

ku-nagombe	→	kwánagombe	「ナゴンベ (地名) へ」
ku-namaguú	→	kwánamaguú	「ナマグー (地名) へ」

この現象は、マテング語に/ma-/という名詞クラス接頭辞（6クラス）が存在していることに影響を受けていると思われる。先に述べたとおり、場所クラスの接頭辞が他の名詞クラス接頭辞の上に付加される場合、その境界には母音が挿入される。語頭音節が/ma/の場合には、それが名詞クラス接頭辞とみなされて、母音挿入が起きていると考えられる。/ma/で始まる語や語幹に名詞クラス接頭辞が付加される場合に、名詞クラス接頭辞の後ろに母音挿入が起こるという現象は1クラスと7クラスでも見られる。

⑪ 20 -4 クラス

20クラスの接頭辞 gu- は「巨大なもの」を表わす拡大辞である。他のクラスの名詞クラス接頭辞をgu-に交替させることで20クラスの名詞になる。ただし、12-13クラスの場合と同じように、名詞が2音節の場合には、他のクラス接頭辞を残したままこの接辞をつける。対の複数形は4クラスに属する。4クラスのクラス接頭辞は、3クラスの対となる場合とは異なり、他の名詞クラス接頭辞を残したまま、さらに付加される。その場合、gu-と同じく、単数形を表わす名詞に付加される。

gú-lěnda - mí-lěnda	「大きい罌」
cf. lílěnda - málěnda	「罌(5-6)」
gú-línu - mí-línu	「牙」
cf. línu (lí-inu) - mínu (ma-inu)	「歯 (5-6)」
gú-dzǐmbwa - mí-dzǐmbwa	「大きい犬 (20-4)」
cf. dzǐmbwa - dzǐmbwa	「犬(9-10)」

4.1.2. 「名詞クラス接頭辞一名詞語幹」以外の構造の名詞

既述のとおり、名詞構造は「名詞クラス接頭辞一名詞語幹」であるが、これとは異なる構造のものもある。ここでは「名詞クラス接頭辞一名詞語幹」という構造以外の名詞の構造について述べる。

4.1.2.1. 名詞クラス接頭辞が2つ付くもの

4.1.1.の例が示すとおり、名詞クラス接頭辞は、他の名詞クラス接頭辞の前に付加が可能なものと、そうでないものに分けられる。前者は、4クラス、12クラス、13クラス、16～18クラス、20クラスのクラス接頭辞である。これらのクラスは、すでに他の名詞クラス

接頭辞によって属するクラスを決定されている名詞に、さらにクラス接頭辞を付加して与えられるクラスであるから、ここではこれらを「二次的クラス」と呼ぶことにする。二次的クラスに属する名詞は、以下のような構造になる。

「二次的クラス」の名詞クラス接頭辞 - 名詞クラス接頭辞 - 名詞語幹

ただし、4クラスが二次的クラスになるのは、20クラスの対になる場合だけで、3クラスの対になる場合には二次的クラスではない。また、12, 13クラス, 20クラスは、これらのクラス接頭辞がつけられる前の「名詞クラス接頭辞-名詞語幹」が3音節以上であれば、元の名詞クラス接頭辞は外れて、二次的クラスの接頭辞が名詞語幹に直接付く。

4.1.2.2. 冒頭母音が付くもの

冒頭母音 + 名詞クラス接頭辞 + 名詞語幹

現在話されている多くのバンツー諸語の中には、名詞クラス接頭辞の前につく「冒頭母音」(augment) という要素が見られるが (Guthrie 1967b~1971), 現在のマテング語には、この要素は基本的にはつかない。しかしながら、わずかではあるが、これを残している名詞がある。

①名詞語幹が1音節 5-6クラスの名詞

ilibu	(i - li - bu)	「石 sg. (5)」
ímabu	(i - ma - bu)	「石 pl. (6)」
ifihu	(i - li - hu)	「灰 (5)」
imâta	(i - ma - ta)	「唾 (6)」

②名詞クラス接頭辞が n-で名詞語幹が2音節の名詞の一部

ímuli	(i - n - muli)	「たいまつ pl. (10)」
ínimi	(i - n - limi)	「舌 pl. (10)」
inǝmu	(i - n - gǝmu)	「下あご pl. (10)」
ihũka	(i - n - huka)	「軒下 pl. (10)」
indêla	(i - n - lêla)	「道(9-10)」 cf. kalêla 「小道(12)」
índzala	(i - n - dzala)	「空腹(9)」

「二次的クラス」の名詞クラス接頭辞が付く場合には、冒頭母音は脱落する。

pálibu	「石の上で(16)」	cf. ílibu - ímabu	「石(5-6)」
kálibu - túlibu	「小石(12-13)」		
gúlibu - mílibu	「岩(20-4)」		

4.1.3. 独立代名詞

独立代名詞は、1人称および2人称を示す場合と、それ以外の名詞を示す場合では異なった語幹をもつ。前者は /-éŋga/, 後者は /-ombí/ である。いずれの場合にも、それが指している名詞の人称、数、名詞クラスに呼応した「代名詞接頭辞」が付く。各クラスに呼応した代名詞接頭辞と独立代名詞は表2に示したとおりである。

<表2：代名詞接頭辞と独立代名詞>

人稱	代名詞接頭辞 (P辞)	独立代名詞 P辞 - éŋga
1人稱 sg.	n-	né/ nêŋga
pl.	tu-	twé/ twêŋga
2人稱 sg.	gu-	gwé/gwêŋga
pl.	mu-	mwé/mwêŋga
名詞クラス		P辞 - ombí
1(3人稱 sg)	dzu-	dzwombi
2(3人稱 pl)	ba-	bombi
3	gu-	gwombi
4	dzi-	dzwombi
5	li-	ljombi
6	ga-	gombi
7	si-	sombi
8	hi-	hjombi
9	dzi-	dzwombi
10	hi-	hjombi
11	lu-	lwombi
12	ka-	kombi
13	tu-	twombi
14	gu-	gwombi
15	ku-	kwombi
16	pa-	pombi
17	ku-	kwombi
18	mu-	mwombi
20	gu-	gwombi

1 人称と 2 人称を表わす独立代名詞は、それぞれ 2 つの形をあげているが、左が文中、右がポーズの前に現われる形である。/ɔmbí/ が用いられる独立代名詞は、すでに会話の中で紹介されたものを示す。これは、その対象物がその発話場所に存在していない場合にしか用いられない。

1) né nahemala lúhăgi. 「私は皿を買った」

ne n - a - hémel- a(dʒe)⁴ lúhagi.
1sg 「私」 S1sg-過去・「買う」 - 非完 F 「皿(11)」

2) gwé gutúdzangati tēnga 「君は(いつも)我々を手伝ってくれる」

gwé gu - tu - dzangati(l - a) tēnga
2sg 「君」 S2sg - O1pl - 「手伝う」 - 基 F 1pl 「我々」

3) dzwabomba lúhăgi 「彼は皿(11)を作った」

lwombí lwabi lúkolōngu 「それ(11クラス)は大きかった」

lu-ɔmbí lu - a - bé-i(ti) lú-kolōngu
「それ(11)」 S(11)-過 T・be-完 F 「大きい(11)」

独立代名詞は、名詞と同じく、単独で主語や目的語となり得る。ただし、関係節以外の修飾語を後に続けることはできないという点で、名詞とは異なる。

4.1.4. 名詞の声調

ここではわかりやすくするために、音素としての長母音だけでなく、長母音化して現われる母音の後ろにはすべて長母音の印 (:) を付す。H, L, F, R は音節単位で表わした声調で、アンダーラインは、それが 2 モーラであることを表わす。

4.1.4.1. 名詞クラス接頭辞の声調

4.1.1. であげた各名詞クラスの例からもわかるように、同一の語幹をもつ名詞は、名詞クラス接頭辞の音節構造が同じであれば、通常、クラスに関係なく同じ声調パターンで現われる。しかしながら、5-6 クラスの対にはそうでないものがある。

⁴ 例文中の () で括った音節は、脱落などによって表層化しない音節である (5.5.3.7. 参照)。以下同様。

5クラス (単数)		6クラス (複数)	
li-bá:ta (5)	L - <u>H</u> L	—	má-bǎ:ta (6) H - <u>R</u> L 「アヒル」
li-ŋgɛ:ngé:sa(5)	L - <u>L</u> <u>H</u> L	—	má-ŋgɛ:ngé:sa (6) H - <u>L</u> <u>H</u> L 「足鈴」

同じ語幹をもっているのであるから、声調パターンが異なるのは名詞クラス接頭辞の声調の違いによるものと考えられる。6クラスの例にあげたHRLとHLHLの声調パターンは5クラスと場所クラス(16~18クラス)を除くすべての名詞クラスで見られる。一方、5クラスの例にあげたLHLやLLHLの声調パターンは5クラスと場所クラスにしか現われない。また5-6クラスの接頭辞を二次的クラスの接頭辞と交替させた場合、これらは6クラスと同じ声調パターンで現われる。

lilé:nda - málě:nda	「罌 (5-6)」	L - <u>H</u> L	—	H - <u>R</u> L
gúlě:nda - mílě:nda	「大きい罌(20-4)」	H - <u>R</u> L	—	H - <u>R</u> L

これらのことから、5クラスと場所クラスの名詞クラス接頭辞は、他の名詞クラス接頭辞とは異なる基底声調、あるいは異なる性質を有すると考えられる⁵。

4.1.4.2. 名詞語幹の声調

最も多様な現われ方をする3音節語幹の名詞を例に、名詞語幹の声調を見ていくことにする。名詞クラス接頭辞の異なる振る舞いの影響を比較するために、例には5-6クラスの名詞を用いる。4.1.4.1.で述べたとおり、5クラスと場所クラス以外の名詞クラス接頭辞は、すべて6クラスの名詞クラス接頭辞と同じ振る舞いである。従って、Aの6クラスの声調パターンを「5クラスと場所クラス以外のすべてのクラス接頭辞」として扱う。Bは

⁵ Turuka (1983:218) も、5クラスの名詞クラス接頭辞の声調が他の名詞クラス接頭辞とは異なる振る舞いをしていることに触れ、その理由について、「(5クラスと6クラスが) 同じ名詞語幹をもつ単数形と複数形であるのに異なる声調で現われていることについては、スワヒリ (Swahili) 語、ジグア (Zigua) 語、ンガジジャ (Ngazidja) 語、ンセンガ (Nsenga) 語、イハンゴ (Ihango) 語、コンゴ (Kongo) 語、ペンデ (Pende) 語などの言語に見られるように、5クラスの名詞クラス接頭辞が消えた、ということで説明できる。もしマテンゴ語が、ある段階で5クラス名詞クラス接頭辞を失って、その後、周辺の言語からもう一度取りこまれたのであれば、5クラス名詞クラス接頭辞 li-は、それを持ち込んだ言語 (Source languages) に見られるあらゆる声調パターンで現われ得る」と述べている。本論文では、5クラスの名詞クラス接頭辞が他の名詞クラス接頭辞と異なる振る舞いをするという共時的現象を扱うにとどめ、その経緯についての検証はしないが、/li/で始まる固有名詞に場所クラスの名詞クラス接頭辞が付く場合に/li/という音節が脱落する(4.1.1.⑩参照) ことは、Turuka (1983) の言う、ある時点でマテンゴ語から5クラスの名詞クラス接頭辞が消えた、という考えの裏付けになるだろう。

5クラスの声調パターンである。なお、場所クラスについては、名詞の構造が異なるので、4.1.4.4.4.で別に扱うことにする。

3音節語幹名詞の孤立形の声調パターンには以下の6通りがある。

I. A	H-LLL	má-téle:ku	「土鍋 pl.(6)」
B	L-HLL	li-téle:ku	「土鍋 sg. (5)」
II. A	H-LLL	má-tala:bu	「平たい石 pl. (6)」
B	H-LLL	lí-tala:bu	「平たい石 sg. (5)」
III. A	L-HLL	ma-séta:ni	「トンボ pl. (6)」
B	L-HLL	li-séta:ni	「トンボ sg. (5)」
IV. A	H-LFL	má-tutû:ma	「滝 pl. (6)」
B	L-LFL	li-tutû:ma	「滝 sg. (5)」
V. A	H-LHL	má-tópi:to	「果物の一種 pl. (6)」
B	L-LHL	li-tópi:to	「果物の一種 sg. (5)」
VI. A	L-LFL	ma-tipwâ:li	「煉瓦 pl. (6)」
B	L-LFL	li-tipwâ:li	「煉瓦 sg. (5)」

II, III, VIでは、対のAとBが同じ声調パターンで現われているが、I, IV, Vでは、AとBの対が異なる声調で現われている。また、IのAとIIのAは同じ声調パターンで現われているが、それぞれの対であるIのBとIIのBの声調パターンは異なっている。

上記の例は孤立形の場合であるが、環境が変わると、声調の現われ方も変わってくる。

◆ 名詞の後ろに Hが続く環境 : 名詞+ - ilihaha 「悪い～」 (H- LLL)

I. A	má-teleku	gíliha:ha	H-LLL HLLL	「悪い土鍋 pl.」
B	li-teleku	líliha:ha	L-LLL HLLL ⁶	「悪い土鍋 sg.」

⁶ 音声的には、語頭が他より低く、L-HHH HLLLあるいはL-MMM HLLL (M =Mid) のように聞こえる。しかしこれは、語頭のLが他のLより低く発音されるためであり、音韻的にはL-LLL HLLLである。

II. A	ma-talabu gíliha:ha	L-LLL HLL	「悪い平たい石 pl.」
B	li-talabu líliha:ha	L-LLL HLL	「悪い平たい石 sg.」
III. A	ma-sétani gíliha:ha	L-HLL HLL	「悪いトンボ pl.」
B	li-sétani líliha:ha	L-HLL HLL	「悪いトンボ sg.」
IV. A	má-tutúma gíliha:ha	H-LHL HLL	「悪い滝 pl.」
B	li-tutúma líliha:ha	L-LHL HLL	「悪い滝 sg.」
V. A	má-tòpito gíliha:ha	H-LLL HLL	「悪い果物 pl.」
B	li-tòpi:to líliha:ha	L-LLL HLL	「悪い果物 sg.」
VI. A	ma-tipwáli gíliha:ha	L-LHL HLL	「悪い煉瓦 pl.」
B	li-tipwáli líliha:ha	L-LHL HLL	「悪い煉瓦 sg.」

◆ 名詞の後ろにLが続く環境： 名詞 + -njahi 「良い」 (L-FL)

I. A	má-teleku manjâ:hi	H-LLL LFL	「良い土鍋 pl.」
B	li-teleku linjâ:hi	L-LLL LFL	「良い土鍋 sg.」
II. A	ma-talabu manjâ:hi	L-LLL LFL	「良い平たい石 pl.」
B	li-talabu linjâ:hi	L-LLL LFL	「良い平たい石 sg.」
III. A	ma-sétani manjâ:hi	L-HLL LFL	「良いトンボ pl.」
B	li-sétani linjâ:hi	L-HLL LFL	「良いトンボ sg.」
IV. A	má-tutúma manjâ:hi	H-LHL LFL	「良い滝 pl.」
B	li-tutúma linjâ:hi	L-LHL LFL	「良い滝 sg.」
V. A	má-tòpito manjâ:hi	H-LLH LFL	「良い果物 pl.」
B	li-tòpito linjâ:hi	L-LLH LFL	「良い果物 sg.」
VI. A	ma-tipwáli manjâ:hi	L-LHL LFL	「良い煉瓦 pl.」
B	li-tipwáli linjâ:hi	L-LHL LFL	「良い煉瓦 sg.」

IとIIのA, IとIIIのBは, 孤立形ではそれぞれ同じ声調パターンで現われていたが, 後続語がある環境では声調パターンに違いが出てくる。またVのように同じく後続語がある場合でも, それがHで始まっているかLで始まっているかによって名詞の声調パターンが異なることもある。

以上の声調パターンの例をまとめると表3のようになる。

<表3 : 語幹が3音節の名詞の環境別声調パターン>

		3音節語幹名詞		孤立形	+ - ílihaha (HLLL)	+ - njâhi (LFL)
I	A	土鍋 pl.	má-tele:ku	H-LLL	H-LLL HLLL	H-LLL LFL
	B	土鍋 sg.	li-téle:ku	L-HLL	L-LLL HLLL	L-LLL LFL
II	平石 pl.	má-tala:bu	H-LLL	L-LLL HLLL	L-LLL LFL	
	平石 sg.	lí-tala:bu				
III	トホ [*] pl.	ma-séta:ni	L-HLL	L-HLL HLLL	L-HLL LFL	
	トホ [*] sg.	li-séta:ni				
IV	A	滝 pl.	má-tutûma	H-LFL	H-LHL HLLL	H-LHL LFL
	B	滝 sg.	li-tutû:ma	L-LFL	L-LHL HLLL	L-LHL LFL
V	A	果物 pl.	má-topí:to	H-LHL	H-LLL HLLL	H-LLH LFL
	B	果物 sg.	li-topí:to	L-LHL	L-LLL HLLL	L-LLH LFL
VI	煉瓦 pl.	ma-tipwâ:li	L-LFL	L-LHL HLLL	L-LHL LFL	
	煉瓦 sg.	li-tipwâ:li				

ABの区別をしているものは, 名詞クラス接頭辞の声調によって対の名詞の声調パターンに違いがあるものである。ABの区別がないものは, 名詞接頭辞の声調に係わらず, 対の名詞が同じ声調パターンで現われているものである。

4.1.4.3. 基底声調と規則

ある環境で同じ声調パターンで現われていても別の環境では異なった現われ方をするという場合, これらの基底声調に違いがあると考えられる。つまり, これらの声調は, 基底では異なっていたが, それが表層化するにあたって規則が適用された結果, (偶然) 同じ声調パターンとして実現された, ということである。ここでは, それぞれの基底声調と, そこに適用されていると考えられる規則について考察していく。

孤立形と後続語のある形, それぞれが同じような声調パターンで現われているものを語幹の音節数別にまとめたのが表4である。語幹の音節数に関係なく, 同じような声調パターンで現われるもの, つまり表の横の各列を「声調グループ」と呼ぶことにする。

<表 4 : 名詞語幹音節数別声調パターン>

語幹	2 音節	3 音節	4 音節	5 音節
I A	H - LL má-be:ga 肩	H - LLL má-tele:ku 土鍋	H - LLLL má-ŋeŋgale:ma 鈴	H - LLLLL má-tondalako:u 胃
	H - LL HLLL H - LL LFL	H - LLL HLLL H - LLL LFL	H - LLLL HLLL H - LLLL LFL	H - LLLLL HLLL H - LLLLL LFL
B	H - LL lí-be:ga 肩	L - HLL lí-téle:ku 土鍋	L - HLLL lí-ŋeŋgale:ma 鈴	L - HLLLL lí-tónḍalako:u 胃
	L - LL HLLL L - LL LFL	L - LLL HLLL L - LLL LFL	L - LLLL HLLL L - LLLL LFL	L - LLLLL HLLL L - LLLLL LFL
II	H - LL má-he:ngu 仕事 lí-he:ngu 仕事	H - LLL má-tala:bu 平石 lí-tala:bu 平石	H - LLLL má-songule:la アロエ lí-songule:la アロエ	
	L - LL HLLL L - LL LFL	L - LLL HLLL L - LLL LFL	L - LLLL HLLL L - LLLL LFL	
III	L - FL ma-hí:na 切り株 lí-hí:na 切り株	L - HLL ma-séta:ni トンボ lí-séta:ni トンボ	L - HLLL ma-pwátaki:la トマト lí-pwátaki:la トマト	
	L - HL HLLL L - HL LFL	L - HLL HLLL L - HLL LFL	L - HLLL HLLL L - HLLL LFL	
IV A		H - LFL má-tutû:ma 急流	H - LHLL má-kelábe:la 鳥の名	H - LHLLL kí-pelá pate:la 寝ゴザ
		H - LHL HLLL H - LHL LFL	H - LHLL HLLL H - LHLL LFL	H - LHLLL HLLL H - LHLLL LFL
B		L - LFL lí-tutû:ma 急流	L - LHLL lí-kelábe:la 鳥の名	
		L - LHL HLLL L - LHL LFL	L - LHLL HLLL L - LHLL LFL	
V A	H - RL má-hí:na 名前	H - LHL/H - LRL má-topí:to 果物		
	H - LL HLLL H - LH LFL	H - LLL HLLL H - LLH LFL		
B	L - HL/ L - RL lí-hí:na 名前	L - LHL/ L - LLRL lí-topí:to 果物		
	L - LL HLLL L - LH LFL	L - LLL HLLL L - LLH LFL		
VI		L - LFL ma-tipwáli 煉瓦 lí-tipwáli 煉瓦	L - LLFL ma-kalatâ:si 紙 lí-kalatâ:si 紙	
		L - LHL HLLL L - LHL LFL	L - LLHL HLLL L - LLHL LFL	

表の左端のローマ数字がそれぞれの声調グループの名前を表わす。各欄には、上から、孤立形の声調、名詞、Hで始まる後続語 -ilihaha「悪い～」をつけた場合の声調、Lで始まる後続語 -njâhi「良い～」を続けた場合の声調、の順で記してある。/ がついているものは、自由変異を意味する。語幹が4音節以上の名詞は数が少ないため、該当する例がないものは空欄にしてある。

表4のうち、I～Vのパターンに関しては際立った偏りなく、それぞれのパターンにあてはまる例がある（資料「語彙集」参照）。しかしながら、VIのパターンの例に関しては、スワヒリ語からの借用語に限られることから、これは、スワヒリ語の声調パターンをそのまま取り込んだと思われる⁷。従って、ここではVIを除いたI～Vの声調パターンについて考察していくことにする。

3.4.で述べたとおり、この言語はHのみが特定されていると考えられるので、Hの位置に留意して表を概観すると、孤立形および後続語がある形におけるHの現われ方について、次のようなことが観察される。

- ◆ 末尾音節にHはこない
- ◆ 孤立形の場合、語中に必ず1つ以上2つ以下のHがある（全部Lのものはない）
- ◆ 語幹のHは1つ以下である

Aの名詞を見ると、I、IIの語幹はすべてL、IIIは語幹頭がH、IVは語幹頭の右隣がH、Vは次末音節にHがある。次末音節にHがくる場合には、音節としてはFで現われているはずだが、Vの次末音節はFではなくHで現われている。次末音節のHがRと交替可能であることから、VのHは“本来の”Hではなく、語末のHが左隣のモーラにずれて現われていると考えられる。つまりVは、本来はHが末尾音節にある。manjâhi「良い」という後続語を置いて末尾という環境をはずせばHが語末に現われていることからこれは裏付けられる。Hで始まる後続語の場合には語末はLで現われているが、これは境界でHが重なったため、前方の（つまりVの語末の）Hがキャンセルされたと考えられる。以上のことから次のようなことが言える。

- ◆ 語末に位置するHは孤立形では左隣にずれて現われる
- ◆ Hが境界で重なった場合、前方のHはキャンセルされる

⁷ スワヒリ語には声調の対立はない。通常次末音節にアクセントが置かれることから、孤立形では3音節語幹の名詞はLLFL、4音節語幹の名詞はLLLFLと発音されることになる。

Aの名詞クラス接頭辞は、ⅢはL、それ以外はHで現われている。Ⅲ以外の語幹はすべてLで始まっていることから、名詞クラス接頭辞が語幹頭とは逆の声調で現われるとも考えられる。つまり名詞クラス接頭辞は特定の声調を有しておらず、常に語幹頭の声調とは反対の声調で現われるという考え方である。しかしながら、Ⅱの後続語がある形のように、名詞クラス接頭辞と語幹頭のLが重なっている例がある⁸。仮に「後続語がある場合には、Lが重なってもよい」という規則があるとすれば、Ⅰ、Ⅳ、Ⅴの後続語がある形に名詞クラス接頭辞がHである理由がなくなる。従って、名詞クラス接頭辞が常に語幹と逆の声調で現われると考えるのは無理がある。そこで先にあげた「Hが境界で重なった場合、前方のHはキャンセルされる」という規則を基に、名詞クラス接頭辞の基底声調をHであると仮定する。ⅢではそのHが、語幹のHと重なったためにキャンセルされ、Ⅲ以外は語幹頭がLであるから名詞クラス接頭辞はHのまま現われている、と考えればAの名詞の声調については説明がつく。

次にB、すなわち5クラスの名詞である。5クラスの名詞クラス接頭辞は、名詞語幹頭がHであってもLであっても、Lで現われることができるので、語幹頭の声調に影響されているとは考えられない。また5クラスの名詞クラス接頭辞が6クラス（および5クラス以外のすべての名詞クラス接頭辞）とは異なる基底声調あるいは性質を有することから、5クラスの名詞クラス接頭辞の声調がLであると考えると、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴは説明がつく。

Ⅰについては、Ⅰの語幹がすべてLであるならば語中にHは全くなくなってしまわずである。しかしながら実際には、2音節語幹の場合は語頭、語幹が3音節以上の場合には語頭から2番目がHで現われている。そこで次のような規則が考えられる。

「語中にHが全くない場合には、語頭から2番目の音節がHになる。ただし、3音節以下の名詞の場合には語頭がHになる」

Ibの名詞は、後続語がある環境ではすべてLになっている。これは、後続語がHを持っているため名詞句の中にHができたので、上記の規則を適用する必要がなくなったということである。他にもⅡやⅤのように、後続語がある形では名詞がすべてLで現われている例がある。つまりHは、語中ではなく名詞句内に最低1つあればよいということになる。

さて、Ⅱについてはどう考えるべきだろうか。Aのほうでも、Ⅱは後続語がある場合に

⁸ Ⅰ、Ⅳ、Ⅴの5クラスの名詞も名詞クラス接頭辞と語幹頭のLが重なっているが、5クラスの名詞クラス接頭辞は他の名詞クラス接頭辞とは基底声調が違うか、あるいは異なる振る舞いをする性質をもつので、この場合の比較からははずした。

孤立形とは異なった現われ方をしているが、これについては説明がついていない。ⅡもⅠと同じく語幹がすべてLであると考えれば、Bでは孤立形の名詞クラス接頭辞がHになっている理由が必要であるし、Aでは後続語がある場合に名詞クラス接頭辞がLになっている理由が必要である。ⅠもⅡもAの独立形はH-L L Lで現われているが、それぞれの対のBが異なる現われ方をしていることから、これらはそれぞれ異なるプロセスでH-L L Lと現われることになったと考えられる。また、孤立形と後続語がある形で名詞クラス接頭辞の現われ方が異なっているのはⅡだけであることや、(Ⅰの2音節を除いては)Bの接頭辞がHで現われているのはⅡだけであることなど、Ⅱが他の声調グループとは異なる性質をもっている可能性は高い。そこでⅡのH-L L Lについて「Hが語幹の直前」⁹と考えてみる。つまりAの接頭辞がHで現われているのは、その声調がもともとHだからではなく、「語幹の直前をHにする」という語幹のもつ性質による、と仮定する。

このように考えると、次に問題になるのが、後続語がある形である。後続語がある場合、名詞クラス接頭辞(つまり語幹の直前)はLになっている。ということは「語幹の直前をHにする」という性質は孤立形の場合のみ機能するということになる。しかももともとHであったAの接頭辞までLで現われている。このことについては、2とおりの考え方ができる。ひとつは、Ⅱクラスの語幹に付いた段階で名詞クラス接頭辞が本来もっていた声調はキャンセルされてしまったという考え方、もうひとつは、A、すなわち5クラス以外の名詞クラス接頭辞にはHで現われるものとLで現われるものの2とおりがあるといえる考え方である。しかしながら、Aのクラス接頭辞がLで現われているⅢの場合について考えてみると、名詞クラス接頭辞がLであったと考えられないことはないが、これは境界でHが重なるためにLになったと説明できるので、そのように考えるメリットは特にない。そうするとAの名詞クラス接頭辞に2とおりを認めるのはⅡのためだけということになる¹⁰。Ⅱはいずれにしても語幹が名詞クラス接頭辞に影響を与える性質をもっているのであるか

⁹ これは他の声調グループとはまったく違った種類の振る舞いのようなものであるが、マテンゴ語の周辺言語にも同じような語幹の性質が報告されている。キング(Kinga)語はマテンゴ語が話されているンビンガ県の北隣ンジョンベ(Njombe)県で話されている言語であるが、この言語では各単語に必ずひとつだけHがあり、それが現われる位置が①後ろから3音節め、②語幹の直前、③後ろから2音節め、となっている(Schadeberg 1973:24)。

¹⁰ ただし、分析から外した声調グループVI(80ページ参照)を考えに入れるのであれば、5クラス以外の接頭辞に、Hで現われるものとLで現われるものの2とおりを認めることに意味が出てくる。その場合には、声調グループⅡにおけるAのクラス接頭辞について説明がただけでなく、声調グループⅢについても新たな解釈の可能性が出てくる。

ら、この場合に更に名詞クラス接頭辞自体の声調に区別をつける必要はないと思われる。従って、6クラスの接頭辞がLになるのは2とおりあるからではなく、IIの語幹に付いた段階で接頭辞がもっていたHがキャンセルされたためであると考えられる。

以上をまとめると、各声調グループの名詞語幹と名詞クラス接頭辞の基底声調は次のようになる。

名詞クラス接頭辞の基底声調

5クラスの接頭辞	: L
5クラスと場所クラス以外の接頭辞	: H

各声調グループの名詞語幹の基底声調

	Hの位置
声調グループI : すべてL	(0)
声調グループII : 語幹の直前がH (語幹自体はすべてL)	(-1)
声調グループIII : 語幹頭がH	(+1)
声調グループIV : 語幹頭の右隣のモーラがH	(+2)
声調グループV : 語幹末がH	(ラスト)

名詞語幹の声調は、Hが語幹のどこに現われるかによって区別されるのであるから、理論的に考えれば、声調グループは、語幹の音節数(n)に「Hが全くないもの(0)」と「語幹の直前がH(-1)」の2とおりを加えた数だけ、つまり、「n+2」とおり存在することになる。3音節語幹の場合を中心に考えた結果、上記の声調グループI~Vのパターンが認められたが、語幹の音節数が増えれば、+3(語幹頭から3番目がH)、+4、という声調グループの可能性もあるわけである。つまり、表4のIVとVの間には、語幹の音節数によって他にも声調グループが存在すると考えられる。しかしながら、実際には4音節以上の名詞語幹は数が限られているので、そのような例は見つからない。

上記の基底声調が表層化するにあたって適用される規則は、以下のようなまとめられる。

規則

- ◆ Hが重なった場合、前方のHは消える(規則1)
- ◆ 末尾のHは左隣にずれて現われる(規則2)
- ◆ 孤立形で語中にHが全くない場合には、語頭から2番目のモーラがHになる。ただし、3音節以下の名詞の場合には語頭がHになる(規則3)

これに従って、表3の名詞の表層声調を解釈してみよう。○はL，●はHを表わす。ひとつの丸が1モーラを表わす。間隔を広く空けたところが音節の境界である。従って2つ間隔を開けずに並べた丸は1音節で2モーラであることを示す。左側の図式が基底形，右側が規則が適用された後の表層形である。

I 名詞語幹はすべてL

A 名詞クラス接頭辞がHの場合

基底形	表層形	
● - ○ ○	● - ○○ ○	má - be:ga
● - ○ ○ ○	● - ○ ○○ ○	má - tele:ku
● - ○ ○ ○ ○	● - ○ ○ ○○ ○	má - ŋgeŋgale:ma
● - ○ ○ ○ ○ ○	● - ○ ○ ○ ○○ ○	má - tondalako:u

Hで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
● - ○ ○ ● ○ ○ ○	● - ○ ○ ● ○ ○ ○	mábega gíliha:ha

Lで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
● - ○ ○ ○ ● ○	● - ○ ○ ○ ● ○	mábega manjâ:hi

B 名詞クラス接頭辞がLの場合

(規則3)

○ - ○ ○	● - ○○ ○	lí - be:ga
○ - ○ ○ ○	○ - ● ○○ ○	li - téle:ku
○ - ○ ○ ○ ○	○ - ● ○ ○○ ○	li - ŋgeŋgale:ma
○ - ○ ○ ○ ○ ○	○ - ● ○ ○ ○○ ○	li - tóndalako:u

Hで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
○ - ○ ○ ● ○ ○ ○	○ - ○ ○ ● ○ ○ ○	libega líliha:ha

Lで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
○ - ○ ○ ○ ● ○	○ - ○ ○ ○ ● ○	libega linjâ:hi

II 語幹の直前がH

A 名詞クラス接頭辞がHの場合 (◎はその前をHにすることを表わす)

● - ◎ ○	● - ○○ ○	má - he:ngu
● - ◎ ○ ○	● - ○ ○○ ○	má - tala:bu
● - ◎ ○ ○ ○	● - ○ ○ ○○ ○	má - songule:la

Hで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
● - ◎ ○ ● ○ ○ ○	○ - ○ ○ ○	● ○ ○○ ○
		mahengu gíliha:ha

Lで始まる後続語がある場合

● - ◎ ○ ○ ● ○	○ - ○ ○ ○	○ ● ○ ○
		mahengu manjâ:hi

B 名詞クラス接頭辞がLの場合

○ - ◎ ○	● - ○○ ○	lí - he:ngu
○ - ◎ ○ ○	● - ○ ○○ ○	lí - tala:bu
○ - ◎ ○ ○ ○	● - ○ ○ ○○ ○	lí - songule:la

Hで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
○ - ◎ ○ ● ○ ○ ○	○ - ○ ○ ○	● ○ ○○ ○
		lihengu líliha:ha

Lで始まる後続語がある場合

○ - ◎ ○ ○ ● ○	○ - ○ ○ ○	○ ● ○ ○
		lihengu linjâ:hi

III 語幹頭がH

A 名詞クラス接頭辞がHの場合

(規則1)

● - ● ○	○ - ● ○ ○	ma - hí:na
● - ● ○ ○	○ - ● ○○ ○	ma - séta:ni
● - ● ○ ○ ○	○ - ● ○ ○○ ○	ma - pwátaki:la

Hで始まる後続語がある場合 (規則1)

基底形	表層形	
● - ● ○ ● ○ ○ ○	○ - ● ○ ● ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○
		mahína gíliha:ha

Lで始まる後続語がある場合 (規則1)

● - ● ○ ○ ● ○	○ - ● ○ ○ ● ○	○ ● ○ ○
		mahína manjâ:hi

B 名詞クラス接頭辞がLの場合

○ - ● ○	○ - ● ○ ○	li - hí:na
○ - ● ○ ○	○ - ● ○ ○ ○	li - séta:ni
○ - ● ○ ○ ○	○ - ● ○ ○ ○ ○	li - pwátaki:la

Hで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
○ - ● ○ ● ○ ○ ○	○ - ● ○ ● ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○
		lihína líliha:ha
Lで始まる後続語がある場合		
○ - ● ○ ○ ● ○	○ - ● ○ ○ ● ○	○ ● ○ ○
		lihína linjâ:hi

IV 語幹頭の右隣がH

A 名詞クラス接頭辞がHの場合

● - ○ ● ○	● - ○ ● ○ ○	má - tutú:ma
● - ○ ● ○ ○	● - ○ ● ○ ○ ○	má - kelábe:la
● - ○ ● ○ ○ ○	● - ○ ● ○ ○ ○ ○	kí - pelápaté:la

Hで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
● - ○ ● ○ ● ○ ○ ○	● - ○ ● ○ ● ○ ○ ○ ○	● ○ ○ ○ ○
		mátutúma gíliha:ha
Lで始まる後続語がある場合		
● - ○ ● ○ ○ ● ○	● - ○ ● ○ ○ ● ○	○ ● ○ ○
		mátutúma manjâ:hi

B 名詞クラス接頭辞がLの場合

○ - ○ ● ○	○ - ○ ● ○ ○	li - tutû:ma
○ - ○ ● ○ ○	○ - ○ ● ○ ○ ○	li - kelábe:la

Hで始まる後続語がある場合

基底形	表層形	
○ - ○ ● ○ ● ○ ○ ○	○ - ○ ● ○ ● ○ ○ ○ ○	litutúma líliha:ha

Lで始まる後続語がある場合

○ - ○ ● ○ ○ ● ○	○ - ○ ● ○ ○ ● ○ ○	litutúma linjá:hi
-----------------	-------------------	-------------------

V 語幹末がH

A 名詞クラス接頭辞がHの場合

(規則2)

● - ○ ●	● - ○ ● ○	má - hí:na
● - ○ ○ ●	● - ○ ○ ● ○	má - tɔp̃i:to
		→ má tɔp̃i:to

Hで始まる後続語がある場合

(規則1)

基底形	表層形	
● - ○ ● ● ○ ○ ○	● - ○ ○ ● ○ ○ ○ ○	máhina gíliha:ha

Lで始まる後続語がある場合

● - ○ ● ○ ● ○	● - ○ ● ○ ● ○ ○ ○	máhiná manjá:hi
---------------	-------------------	-----------------

B 名詞クラス接頭辞がLの場合

(規則2)

○ - ○ ●	○ - ○ ● ○	li - hí:na
		→ lihí:na
○ - ○ ○ ●	○ - ○ ○ ● ○	li - tɔp̃i:to
		→ litɔp̃i:to

Hで始まる後続語がある場合 (規則1)

○ - ○ ● ● ○ ○ ○ ○ - ○ ○ ● ○ ○ ○
 lihina líliha:ha

Lで始まる後続語がある場合

○ - ○ ● ○ ● ○ ○ - ○ ● ○ ● ○ ○
 lihiná linjá:hi

4.1.4.4. 構造が「名詞クラス接頭辞一語幹」でない名詞の声調

4.1.4.4.1. 冒頭母音が付く名詞 (4.1.2.2.参照)

◆ 1音節語幹の名詞

H - <u>L</u> - L	í - ma: - bu 「石 pl.」	i - ma - bu manjá:hi	「良い石 pl.」
	í - li: - bu 「石 sg.」	i - li - bu linjá:hi	「良い石 sg.」
L - <u>F</u> - L	i - má: - ta 「唾」	i - má - ta manjá:hi	「良い唾」
	i - lí: - hu 「灰」	i - lí - hu linjá:hi	「良い灰」

冒頭母音がつく名詞の場合については、通常なら名詞クラス接頭辞が担っている声調を冒頭母音が担っていると考えれば、「石」は声調グループII, 「灰」と「唾」は声調グループIIIの声調パターンを実現していることになる。つまり声調に関しては、冒頭母音がつく場合には、それが名詞クラス接頭辞として振る舞い、名詞クラス接頭辞と語幹が合わさって2音節語幹として振る舞っている。

◆ 名詞クラス接頭辞が n- の名詞

名詞クラス接頭辞が n- の場合、接頭辞が音節を形成することなく、語幹頭の子音と結合してしまう。従って、語幹の前には、1音節しか残らない。これは、形の上では、他クラスで名詞クラス接頭辞の前に冒頭母音がついていない状態と同じである。右側にあげた 11 クラスの名詞の声調パターンを見ると、語幹の前の声調は、名詞クラス接頭辞の音節で現われる。つまり、接頭辞の前にある母音は、声調に関しては、名詞クラス接頭辞として振る舞っていると考えられる。

H - <u>L</u> L	í - mu:li 「たいまつ pl.」	cf. lú - mu:li 「たいまつ sg.」
	í - ni:mi 「舌 pl.」	cf. lú - li:mi 「舌 sg.」
L - <u>F</u> L	i - ŋô:mu 「下あご pl.」	cf. lu - gô:mu 「下あご sg.」
H - <u>R</u> L	í - hǔ:ka 「軒下 pl.」	cf. lú - hǔ:ka 「軒下 sg.」

4.1.4.4.2. 名詞クラス接頭辞が付かない名詞

9, 10 クラスには名詞クラス接頭辞が見つからない名詞がある。その多くがスワヒリ語からの借用語で、声調グループVIに属するが、以下のような例もある。

			声調グループ		
sô:ma	「ビーズ」	soma injâ:hi	LL	I / II ¹¹	
pé:ti	「指輪」	pefí injâ:hi	LH	V	
hálá:bu	「軍隊アリ」	hálábú injâ:hi	(H)LH	V	

これらの例をみると、2音節の名詞の場合には2音節とも語幹として振る舞っているが、3音節以上の場合には、語頭は名詞クラス接頭辞として振る舞っていることがわかる。2音節名詞の場合には、声調パターンは名詞クラス接頭辞が付く場合の2音節語幹と同じである。しかしながら3音節名詞の場合には、語頭の音節は名詞クラス接頭辞として振る舞い、hálá:bu「軍隊アリ」は声調グループVの声調パターンを実現している。

4.1.4.4.3. 語幹が母音で始まる名詞

語幹頭が母音で始まる場合、名詞クラス接頭辞の母音と語幹頭の母音が融合するため、境界がなくなってしまう。その場合にも、4.1.4.4.2.で示した名詞クラス接頭辞が見つからない名詞と同じ現象が起こる。すなわち、名詞が2音節になった場合には、そのどちらの音節も語幹として振る舞うが、3音節以上になる場合には、最初の音節は名詞クラス接頭辞、残りの音節は語幹として振る舞う。

接頭辞	語幹	名詞		声調グループ
li-	-inu	lí:nu	「歯 sg.」	linu linjâ:hi I / II
ma-	-inu	mí:mu	「歯 pl.」	minu manjâ:hi I / II
li-	-ina	lí:na	「落とし穴 sg.」	lína linjâ:hi III
ma-	-ina	mí:ma	「落とし穴 pl.」	mína manjâ:hi III
li-	-ungula	ljungúla	「蛙の種類 sg.」	ljungúla linjâhi III
sa-	-embembi	sémbě:mbi	「みぞおち sg.」	sémbembí kinjâ:hi V

¹¹ 声調グループIとIIの違いは、語幹の前（接頭辞）にしかない。従って、語幹だけの場合には、声調グループIと声調グループIIの差はなくなってしまう。

4.1.4.4. 場所クラスの名詞

4.1.4.1.で、場所クラスの名詞クラス接頭辞は、5クラス以外の名詞クラス接頭辞とは異なる基底声調を有すると述べたが、ここで具体的な現われを見てみよう。

Hで始まる名詞に接辞した例

pa-kálo:si	L-HLL	「小川で」	cf. kálo:si	「小川(12)」
ku-lúba:ndza	L-HLL	「中庭あたり」	cf. lúba:ndza	「中庭(11)」
mwi-kítele:ku	L-HLLL	「鍋の中」	cf. kítele:ku	「鍋(7)」

Lで始まる名詞に接辞した例

pu-lukê:la	L-LFL	「午前中」	cf. lu-ke:la	「朝(11)」
ku-kaní:sa	L-LFL	「教会あたり」	cf. kaní:sa	「教会(9)」
mwi-lidzamâ:nda	L-LLFL	「かごの中」	cf. lidzamâ:nda	「かご(5)」

後ろにくる名詞語頭の声調に関係なく、場所クラスの接頭辞はLで現われている。Hで始まる名詞については、その前にHが来たとしても、名詞語頭のHと重なることでそれはキャンセルされてしまうため、場所クラス接頭辞の基底声調を判断することはできない。しかし、Lで始まる名詞に付く場合にもLで現われていることから、場所クラス接頭辞の基底声調は、5クラスの接頭辞と同じく、Lであると考えられる。

4.1.4.5. 名詞5クラス接頭辞の長母音

5クラスの名詞クラス接頭辞の声調が他のクラス接頭辞とは異なる振る舞いをするのはすでに見てきたが、それ以外にも他のクラス接頭辞とは異なる性質が見られる。

クラス接頭辞の母音はすべて短母音であるが、声調グループIとIIに属する2音節語幹の名詞の中には、5クラスのクラス接頭辞の母音が長母音で現われるものがある。対になる6クラスの名詞を見ると、クラス接頭辞は短母音で現われているので、語幹頭に母音があるとは考えられない。また、後続語がある形では、接頭辞の長母音は短母音化する。

声調グループ I

ĩ:dʒo:ka - mádʒo:ka	Ē - LL - H - LL	「へビ」
lidʒo:ka linjâ:hi - mádʒo:ka manjâ:hi		「良いへビ」
	L- LL LFL - H - LL LFL	

声調グループⅡ

l̥i:lo:ba - málo:ba ̥ - LL - H - LL 「花」

l̥iloba linjâ:hi - maloba manjâ:hi 「良い花」

L- LL LFL - H - LL LFL

このような名詞の多くが声調グループⅠに属しているが、声調グループⅡにもわずかながら見られる。この長母音は、一部の年配者にのみ聞かれ、ほとんどの人はすべて短母音で発音している。インフォーマントにもかなりのゆれが見られ、消滅していく過程にある現象であると思われる。現段階では十分なことがわかっていないため、本論文では5クラス接頭辞に見られるこの長母音を分析の中で扱わなかったが、そのような現象が見られることを報告しておく。

4.2. 連体修飾語

連体修飾語には、①性質や状態、属性を表わすもの、②数量を表わすもの、③ある場所を表わすもの、④所有関係を表わすもの、などがあり、常に被修飾名詞の後ろに位置する。

連体修飾語には、被修飾名詞が属する名詞クラスに呼応した接辞が付くが、その場合、名詞クラス接頭辞が付くものと代名詞接頭辞が付くものに分けられる。名詞クラス接頭辞が付く場合には、2音節以上の名詞語幹に付く場合に現われた異形態（つまり表1で「名詞クラス接頭辞②」としてあげたもの）をとる。代名詞接頭辞が付くものには、そのまま付加されるものと、代名詞接頭辞の後ろに母音を付けたものを付加されるもの¹²がある。代名詞接頭辞の後ろに付く母音は、代名詞接頭辞の母音が/u/の場合には/o/, /ɨ/ の場合には/e/, /a/ の場合には /a/, となる。つまり、それぞれ代名詞接頭辞の母音より舌の位置が一段低い母音である。/a/ の場合には舌の位置がそれより低いものがないため、/a/となる。この節の表中では、これらの母音をVと表わすことにする。

<表5：連体修飾語に付く接頭辞>

名詞クラス	名詞クラス接頭辞 ②	代名詞接頭辞 (P辞)	代名詞接頭辞-V (P辞-V)
1	ŋ-(ú-)	dʒu-	dʒo-
2	á-	ba-	bə-
3	ŋ-(ú-)	gu-	go-
4	mí-	dʒi-	dʒe-
5		li-	le-
6	má-	ga-	gə-
7	kí-	si-	se-
8	í-	hi-	he-
9	n-	dʒi-	dʒe-
10	n-	hi-	he-
11	lú-	lu-	lo-
12	ká-	ka-	kə-
13	tú-	tu-	to-
14	ú-	gu-	go-
15	kú-	ku-	ko-
16		pa-	pə-
17		ku-	ko-
18		mu-	mo-
20	gú-	gu-	go-

¹² これは関係節を作る「関係辞」の形態である。関係節と関係辞については第6章で述べる。

- 名詞クラス接頭辞②が付くもの : 形容詞
- 代名詞接頭辞が付くもの : 所有形容詞, 属辞, 数量形容詞, 指示形容詞

4.2.1. 名詞クラス接頭辞をとる連体修飾語 : 形容詞

連体修飾語のうち, 形容詞は, 事物の性質や状態, 性状を表わし, 被修飾名詞が属する名詞クラスに呼応して名詞クラス接頭辞②をとる。ただし, 形容詞語幹が母音で始まる場合には代名詞接頭辞をとる。

さて, 形容詞は「名詞クラス接頭辞②-形容詞語幹」から成るが, この構造は名詞の構造によく似ている。接頭辞の現われ方が異なるのは語幹が母音で始まる場合だけで, それ以外の場合には同形であり, 名詞と形容詞の区別が難しい場合もある。例えば以下のような場合である。

- 3) mundu ŋkolôŋgu (mu-ndu ŋ-kolôŋgu) 「大きい人」
 「人(1)」 「大きい(1)」
- 4) ŋkolôŋgu dzwímɔ (ŋ-kolôŋgu dzu-ímɔ) 「ひとりの偉大な人」
 「偉大な人(1)」 「ひとり(1)」

例 3 では, ŋkolôŋgu は名詞に後続する形容詞であるが, 例 4 では, 同じ (に見える) 語が名詞として現われている。従って, 3 と 4 のように同形の名詞クラス接頭辞の場合には, 語の構造からだけでは, それが名詞であるか形容詞であるかの判断はできない。そこで統語的な違いを考える必要がある。名詞は単独で名詞句をつくることのできるのに対して, 形容詞は先行名詞を伴わずに現われることができない, という統語的な違いが名詞と形容詞の間にはある。これが例 4 の ŋkolôŋgu を名詞であると判断した根拠である。

マテング語では, 「性質や状態を表わす」という役割を多くの場合, 動詞が果たしているため, 形容詞語幹の数は多くない。語彙調査で約 4000 項目集めた中で, 形容詞語幹と呼べるものは以下のとおりである。なお左列の語幹に付した声調は基底声調 (後述), 右列の例に付した声調は表層声調である。

色, 形状

- | | | | |
|--------|------|---------------|----------|
| -dzilo | 「黒い」 | ilibu lídzilo | 「黒い石(5)」 |
| -kéli | 「赤い」 | ingobu ngéli | 「赤い布(9)」 |

-húhu	「白い」	utopí uhúhu	「白い粘土(14)」
-dzípí	「短い」	lútela lúdzipi	「短い棒(11)」
-kolóŋgu	「大きい」	likóló líkolóŋgu	「大きい洞窟(5)」
-lâsu	「長い, 高い」	kípatakila kilâsu	「長い棹(7)」
-sokó	「小さい」	ŋkóŋgu ŋsókó	「小さい木(3)」
-dzodzohu	「軽い」	imábu mádzodzohu	「軽い石(6)」

状態

-dzomó	「乾いた」	lúsemba lúdžomo	「乾いた皮(11)」
-pehí	「湿った」	lúsemba lúpěhi	「湿った皮(11)」
-móhu	「腐った」	ipámá imóhu	「腐った肉(9)」
-hímó	「冷めた」	másibá mahímó	「冷めた牛乳(6)」
-hákau	「悪い」	kitábu kihákau	「悪い本(7)」
-ilihaha	「悪い」	mundu dzwílihaha	「悪い人(1)」
-njáhi	「よい, 新しい」	inoma injáhi	「新しい太鼓(9)」
-lihulá	「古い」	ŋgela lilihúla	「古い鰻(5)」
-tópu	「空の」	lihólaholu litópu	「空のビン(5)」
-hímau	「肥沃でない」	luhómbi luhímau	「やせた土(11)」
-tópeu	「難しい」	lihengu litópeu	「難しい仕事(5)」
-légaleu	「容易な」	lihengu lilégaleu	「やさしい仕事(5)」
-óme	「特別な」	lihengu ljôme	「特別な仕事(5)」
-amána	「大切な」	sindu samána	「大切な事(7)」
-ŋeŋa	「若い, 未熟な」	mwana úŋeŋa	「赤ちゃん(1)」

名詞語幹と同様に、形容詞語幹も声調グループに分けることができる。声調が表層化するにあたって適用される規則も名詞の場合と同じである。なお、わかりやすくするため、2モーラで現われるところは長母音の印を付す。

I. すべてL

-dzodzohu	「軽い〜」	
ilibu li-dzódzohu		「軽い石 sg.」
imabu má-dzodzohu		「軽い石 pl.」

II. 語幹の前がH

-ilihaha 「悪い～」

litâ:ŋga lí-liha:ha (li-ilihaha) 「出来の悪い扉 sg.」

matâ:ŋga gí-liha:ha (ga-ilihaha) 「出来の悪い扉 pl.」

III. 語幹頭がH

-njáhi 「良い, 新しい～」

lihe:ŋgu li-njâ:hi 「良い仕事 sg.」

mahe:ŋgu ma-njâ:hi 「良い仕事 pl.」

IV. 語幹頭の次がH

-kolóŋgu 「大きい, 強い～」

liteleku li-kolô:ŋgu 「大きい土鍋 sg.」

mateleku má-kolô:ŋgu 「大きい土鍋 pl.」

V. 語幹末がH

-sokó 「小さい～」

liló:mbi li-só:ko 「小さい卵 sg.」

málo:mbi má-só:ko 「小さい卵 pl.」

4.2.2. 代名詞接頭辞をとる連体修飾語

各クラスに呼応する代名詞接頭辞は表5のとおりである。代名詞接頭辞の基底声調はすべてLである。

4.2.2.1. 所有形容詞

所有形容詞は、先行する名詞が誰のものであるかを表わす。「代名詞接頭辞一語幹」で構成される。人称、数によって以下のような語幹が用いられる。

<表6 : 所有形容詞>

	sg.	pl.
1 人称	-áŋgu/ -a	-íto
2 人称	-áko	-íno
3 人称	-áke	-ábo

名詞を伴わずに単独で現われる場合には、「私のもの」、「あなたのもの」などを意味する独立所有代名詞として機能する。その場合、指している名詞が属するクラスに呼応した代名詞接頭辞が付く。

1人称単数、つまり「私の」を表わす所有形容詞は、それがポーズの直前に位置すれば *-ángu* で現われるが、それ以外の場所であれば2音節めが脱落することもある。1人称単数以外は常に同じ形で現われる。

所有形容詞の声調は、先行語にHがある場合にはFL、Hがない場合にはRLで現われる。以下は、*-ángu* 「私の～」の例である。なお、わかりやすくするため、2モーラで現われるところは長母音の印を付す。

I. <i>mábega gâ:ngu</i>	HLL FL	「私の肩 pl.」
<i>libega ljǎ:ngu</i>	LLL RL	「私の肩 sg.」
II. <i>mahe:ngu gǎ:ngu</i>	LLL RL	「私の仕事 pl.」
<i>lihe:ngu ljǎ:ngu</i>	LLL RL	「私の仕事 sg..」
III. <i>mahína gâ:ngu</i>	LHL FL	「私の切株 pl.」
<i>lihína ljǎ:ngu</i>	LHL FL	「私の切株 sg.」
V. <i>máhina gâ:ngu</i>	HLL FL	「私の名前 pl.」
<i>lihina ljǎ:ngu</i>	LLL RL	「私の名前 sg.」

4.2.2.2. 属辞

「～(M1)の・・・(M2)」という表現は、「～の」を意味する「属辞」が用いられる。語順は次のようになる。

<i>lihina</i>	<i>lja</i>	<i>hómba</i>	「魚の名前」
「名前(5)」	属辞(5)	「魚(10)」	
(M2)		(M1)	

属辞は、M1が人物か否かで、2とおりの形に使い分けがなされる。*-á*はM1が人物ではない場合の属辞(属辞1)、*-áka*は、M1が人物の場合、つまり1クラスか2クラスの名詞の場合の属辞(属辞2)である。属辞は、先行する名詞、つまりM2にあたる名詞が

属するクラスに呼応して代名詞接頭辞をとる。各クラスに呼応する属辞の形態は表 7 に示したとおりである。表中の「P 辞」は代名詞接頭辞を表わす。

属辞の後ろには、挿入母音として、後続する名詞の名詞クラス接頭辞の母音が挿入される (3.2.2.参照)。結果的に属辞の母音は後続する名詞の名詞クラス接頭辞の母音と同じ母音で現われることになる。属辞 2 -áka は、後ろの / a / が挿入母音に融合されるだけでなく、前の / a / もそれに同化して現われる。ただし、属辞の後ろに続くのが 2 音節以下の名詞の場合あるいは名詞クラス接頭辞を取らないもの場合には、母音挿入は起こらない。

<表 7 : 各クラスに呼応する属辞>

名詞クラス	属辞 1	属辞 2
	P 辞 -á	P 辞 -áka
1	dʒwá	dʒwáka
2	bá	báka
3	gwá	gwáka
4	dʒá	dʒáka
5	ljá	ljáka
6	gá	gáka
7	sá	sáka
8	hja	hjáka
9	dʒá	dʒáka
10	hjá	hjáka
11	lwá	lwáka
12	ká	káka
13	twá	twáka
14	gwá	gwáka
15	kwá	kwáka
16	pá	páka
20	gwá	gwáka

以下に各クラスの例をあげるが、それぞれ上側が挿入母音が入らない場合、下側が入った場合の例である。

- | | | |
|------|--------------------|-------------------|
| cl.1 | mwíhi dʒwa líso | 「昨日の泥棒 sg.」 |
| | ngeni dʒwí kihóla | 「キホラ (踊り) の客 sg.」 |
| cl.2 | ageni ba líso | 「昨日の客 pl.」 |
| | ageni búku ŋkósi | 「彼女の友人の客 pl.」 |
| cl.3 | mwíha gwa hómbe | 「魚の骨 sg.」 |
| | ŋkɔŋgu gwi kítanda | 「ベッドにする木 sg.」 |

cl.4	míha dza hóm̄ba	「魚の骨 pl.」
	míkɔŋgu dʒi kíten̄gu	「森の木 pl.」
cl.5	lihína lja dʒímbwa	「犬の名前 sg.」
	lihína ljú ŋkɔŋgu	「木の名前 sg.」
cl.6	mandílisa ga nũmba	「家の窓 pl.」
	máhina gi míkɔŋgu	「木の名前 p.」
cl.7	kilɔnda sa línu	「歯の跡 sg.」
	sindu su kúteleka	「料理の道具 sg.」
cl.8	ípapatila hja ŋgũnda	「家ハトの翼 pl.」
	hindu hju kúteleka	「料理の道具 pl.」
cl.9	ndɔlɔsa dza ndɔa	「結婚式のイヤリング sg.」
	numba dʒu lúhombi	「土の家 sg.」
cl.10	ndɔlɔsa hja ndɔa	「結婚式のイヤリング pl.」
	ndéŋgu hju kúkina	「遊ぶためのこま pl.」
cl.11	lúhandzu lwa lísu	「昨日の薪 sg.」
	luhómbi lwí litúhi	「畑の土」
cl.12	kamwana ka ŋômbe	「牛の赤ちゃん sg.」
	kálosi ki kítika	「谷の小川 sg.」
cl.13	tumwana twa lísu	「昨日の赤ちゃん pl.」
	tútumba twi mílabu	「皮製の小包み pl.」
cl.14	úhembí gwa mbátata	「サツマイモの花 sg.」
	ulehi gu úgwembi	「酒用のシコクビエ」
cl.15	kúboku kwa ndémbu	「象の手(鼻) sg.」
	kúgolu kwí kitêu	「椅子の脚 sg.」
cl.16	mahála pa bându	「人々の場所」
	mahála pu kúgonela	「寝る場所」
cl.20	gúlinu gwa líndu	「野獣の牙 sg.」
	gulɔnda gu gúlinu	「きばの跡 sg.」

16 クラスの属辞を表にあげているが、16 クラスの属辞をとる名詞は、16 クラスの名詞クラス接頭辞をとらない mahála 「場所」と、 pându 「場所」や páhi 「下」のように語幹に場所クラス接頭辞が直接付加される名詞だけである。それ以外の場所クラスの名詞 (16 ~18 クラス) が M1 に位置する場合には、その名詞が、場所クラスのクラス接頭辞を付け

る前に属していたクラスに呼応する。日本語訳の後ろの数字は、その名詞に場所クラス接頭辞が付く前の名詞クラスを示す。

cl.16 pakadza dzáka kapínga	「カピングアの故郷」(9)
cl.16 pántandu gwá hatáli	「危険な橋の上」(3)
cl.17 kwikibéga su úgwembi	「地ビールの土鍋があるあたり」(7)
cl.18 mujumba dzá matupwáli	「煉瓦の家の中」(9)

冒頭母音をもつ名詞が属辞の後ろに位置する場合には、冒頭母音は脱落する。

lihina lí libu	「石の名前」	i-li-bu	「石(5)」
libómba lja ndêla	「道の穴」	i-n-lela	「道(9/10)」
cf. pumba dzí ihêki	「木の家」	i-heki	「切り株(8)」
(ihêkiの i- は冒頭母音ではなく名詞クラス接頭辞)			

属辞は、後ろに名詞だけでなく、前置詞の na (「随伴」を表わす)¹³や ngéli (「非随伴」を表わす)、否定語の nga を続けて、以下のように名詞を修飾することもある。

◆ 「属辞 + na + 名詞」 : ~のある, ~の備わった・・・

likabíla lja ná makíli	「力のある民族」
「民族(5) 属(5) 随伴 「力(6)」	
ipama dza ná bei ngolônggu	「値段の高い肉」
「肉(9) 属(9) 随伴 「値段(8)」 「大きい(8)」	

¹³ naには①「随伴」を表わす前置詞、②語と語あるいは節と節を並列させる接続語、という2つの機能がある。機能に関係なく、naの後ろに名詞が位置する場合、naの後ろに挿入母音が入る。結果的にnaの母音は後ろの名詞の名詞クラス接頭辞の母音と同じ母音になる。ただし後ろに続く名詞が2音節以下の場合および名詞クラス接頭辞をとらない場合には、母音挿入は起こらない。

e.g. kúsoma na kúhandika → kúsoma na-u ku-handika → kúsoma nu kúhandika	「読むことと書くこと」
kúdzenda na limbélele → kúdzenda na-i li-mbélele → kúdzenda ni limbélele	「羊といっしょに歩くこと」
cf. makútu na míhu → makútu na míhu	「耳と目」

másiba gá na mwôto 「熱い牛乳」
 「牛乳(6)」 属(6) 随伴 「熱(9)」

ŋhwai gwi ní kipêpu 「冷氣」
 「風(3)」 属(3) 随伴 「寒さ(7)」

◆ 「属辞 + ngéli + 名詞」 : ~のない・・・

kílebí sa ngéli líkólú 「おかずのない食事」
 「食事(7)」 属(7) 非随伴 「おかず(5)」

mundu dʒwa ngéli lídʒogopu 「恐れのない人」
 「人(1)」 属(7) 非随伴 「恐れ(11)」

◆ 「属辞 + nga + 形容詞」 : ~でない・・・

kitábu sá nga kíjâhi 「良くない本」
 「本(7)」 属(7) Neg 「良い(7)」

音節構造が CSV という属辞1は、本来は2モーラであるが、3音節以上の単語が後続する場合には1モーラになる。本論文では属辞を後続語とは独立して表記しているが、通常ならば語末から4音節め以前に位置した長母音にしか短母音化が起こらないことを考えると、属辞は後続する語の前に付与される「接辞」である可能性も考えられる。少なくとも短母音化に関しては、属辞と後続語は「ひとつの語」として振る舞っている。属辞2の1音節めの音節構造が CSV の場合には、常に後ろに3音節以上続くことになるので、常に短母音化して1モーラで現われる。

属辞1の声調はHであるが、後続する名詞がHで始まる場合にはLで現われる。また、後続する名詞の語頭がHの音節主音的鼻音の場合、そのHが左隣にずれ、属辞はH（またはR）で現われる。以下の例には、長母音で現われる母音に長母音の印を付す。

lihína lja sí:ndu	「物の名前」	(sí:ndu)
lihína lju úhe:mbi agô:	「この花の名前」	(úhě:mbi)
lihína lí litu:ndá alê:	「この果物の名前」	(litú:nda)

lihína ljú mpili:ngu	「丸いものの名前」	(mpili:ngu)
lihína ljü: nkɔ:ngu	「木の名前」	(nkɔ:ngu)

属辞2の声調はHLであるが、後続する名詞の語頭がHの音節主音的鼻音の場合には、LH（またはLR）で現われる。これは、音節主音的鼻音がもっていたHが左にずれ、それによってHが重なることになり、前に位置するHがキャンセルされたためである。

lihína ljáka mwâ:na	「子供の名前」	(mwâna)
lihína ljáka mwá:nalo:mi	「男の名前」	(mwánalomi)
lihína ljúku ŋhíba:ni	「いとこの名前」	(ŋhibâni)
lihína ljukú ŋkolɔngu	「成功者の名前」	(ŋkolɔngu)
lihína ljukü: mbe:hi	「狩人の名前」	(mbeli)

4.2.2.3. 数量形容詞

数量形容詞は、被修飾名詞のクラスに呼応して代名詞接頭辞をとり、その名詞の後ろに位置する。数量をたずねる疑問形容詞もここに含まれる。

<表8：各名詞クラスに呼応した数量形容詞>

名詞 クラス	すべて P辞 -ɔha	いくつ? P辞 -lengá	多くの P辞 -ingi	他の、幾つかの P辞-V-ŋgi	どれでも P辞-okápi P辞-V-la
1	---	---	---	dʒɔŋgi	dʒwokápi dʒɔla
2	bɔha	---	biŋgi	báŋgi	bokápi bɔla
3	gwɔha	---	---	gɔŋgi	gwokápi gɔla
4	dʒɔha	dʒilɛŋga	diŋgi	dʒɛŋgi	dʒokápi dʒɔla
5	lɔha	---	---	léŋgi	ljokápi lɛla
6	gɔha	galɛŋga	giŋgi	gáŋgi	gokápi gɔla
7	sɔha	---	---	séŋgi	sokapi sɛla
8	jɔha	ilɛŋga	hiŋgi	jéŋgi	jokápi jɛla
9	dʒɔha	---	---	dʒɛŋgi	dʒokápi dʒɛla
10	hjɔha	ilɛŋga	iŋgi	jéŋgi	jokápi jɛla
11	lwɔha	---	---	lɔŋgi	lwokápa lɔla
12	kɔha	---	---	káŋgi	kokápi kála
13	twɔha	tulɛŋga	twiŋgi	tɔŋgi	twokápi tɔla
14	gwɔha	dʒilɛŋga	gwiŋgi	gɔŋgi	gwokápi gɔla
15	kwɔha	---	---	---	kwokápi kɔla
16	pɔha	palɛŋga	piŋgi	páŋgi	pokápi gɔla
17	kwɔha	kulɛŋga	kwiŋgi	kɔŋgi	kwokápi kɔla
18	mwɔha	---	mwiŋgi	mɔŋgi	mwokápi mɔla
20	gwɔha	---	---	gɔŋgi	gwokápi gɔla

-íngi「多くの」と-ɛngá「どのくらい」は、単数を表わす名詞を被修飾名詞にとること
はできない。-śha「すべての」は、被修飾名詞が単数を表わす名詞の場合には「それ全体」
という意味になる。

-ímu	「1」	mundu dʒímo	「ひとりの人(1)」
-beli	「2」	bandu ábeli	「2人の人(2)」
-tatu	「3」	imabu gátatu	「3つの石(6)」
-íngi	「多くの」	bandu bíngi	「多くの人(2)」
-śha	「すべての」	mipámba dʒśha	「すべてのナイフ(4)」
	「全体」	íḱoḱngu gwśha	「1本の木全体(3)」
-ɛngá	「どのくらい」	(疑問形容詞)	
		máhombí galénga	「いくつの卵?(6)」

以下の数量形容詞は、代名詞接頭辞に母音が続いた接辞「P辞-V」をとる。-ngiは、被
修飾名詞が単数をあらわす場合には「別の」という意味、複数の場合には「いくつかの、
ある程度の」という意味で用いられる。「どんな～でも、どれでも」を意味する -okápi -la
は2つの部分からなり、それぞれが被修飾名詞に呼応した接頭辞をとる。前半部分は代名
詞接頭辞、後半部分は「P辞-V」をとる。

-V-ŋgi	「別の」	mḱpámba góŋgi	「別のナイフ(3)」
	「いくつかの」	mipámba dʒéŋgi	「何本かのナイフ(4)」
-okápi -V-la	「どれでも」	kibega sokápi sēla	「どんな土鍋(7)でも」
		(si - okápi sē-la)	

4.2.2.4. 指示形容詞

指示形容詞は、指示するものとの距離によって以下のように区別されている。

指示形容詞 1 : 話者のすぐ近く、話者が手にしているもの	P辞 - V - N - P辞 - V
指示形容詞 2 : 話者の近くのもの	a - V - P辞
指示形容詞 3 : 会話の場所から遠いが、見えているもの	P辞 - V - la
指示形容詞 3' : 指示形容詞 3の強調	P辞 - V - la P辞 - V - la
指示形容詞 4 : 聞き手のすぐ近くのもの	hV - P辞 pápo
指示形容詞 5 : その場にはないもの	P辞 - e

各名詞クラスに呼応した指示形容詞は表9で示した形で現われる。指示形容詞3'は、後続語がある場合には、最後の音節の/la/が省略されて現われる。場所クラス16~18クラスの場合には、指示形容詞4が他のクラスと同じ形では用いられないが、表にあげた形で同様の意味を表わす。指示形容詞5は前照呼応に用いられる。対象物がすでに会話の中で紹介されているが、その発話場所に存在していない、という場合にのみ用いられる。

<表9：指示形容詞の体系>

名詞 クラス	指示詞1 P辞-V-N-P辞-V	指示詞2 a-P辞-V	指示詞3 P辞-V-la	指示詞3' P辞-V-la P辞-V-la	指示詞4 hV-P辞 păpɔ	指示詞5 P辞 - ɛ
1	dʒɔndzo	adʒô	dʒɔla	dʒɔládʒôla	hodʒú păpɔ	dʒwɛ
2	bamba	abâ	bala	balábâla	habá păpɔ	bwɛ
3	gɔŋgɔ	agô	gɔla	golágôla	hogú păpɔ	gwɛ
4	dʒɛndze	adʒê	dʒɛla	dʒɛládʒêla	hedʒí păpɔ	dʒwɛ
5	lende	alê	lela	lelálêla	heí păpɔ	lwɛ
6	gaŋga	agâ	gala	galágâla	hagá păpɔ	gwɛ
7	sendze	asê	sɛla	selásêla	hesí păpɔ	sɛ
8	jɛndze	ahjê	jɛla	jɛládjêla	heí păpɔ	hjɛ
9	dʒɛndze	adʒê	dʒɛla	dʒɛládʒêla	hedʒí păpɔ	dʒɛ
10	jɛndze	ahjê	hjɛla	jɛládjêla	heí păpɔ	hjɛ
11	londo	alô	lɔla	lolálôla	holú păpɔ	lwɛ
12	kaŋga	akâ	kala	kalákâla	haká păpɔ	kwɛ
13	tondo	atô	tɔla	tolátôla	hotú păpɔ	twɛ
14	gɔŋgɔ	agô	gɔla	golágôla	hogú păpɔ	gwɛ
15	kɔŋgɔ	akô	kɔla	kolákôla	hokú păpɔ	kwɛ
16	pamba	apâ	pala	palápâla	papâpa	pwɛ
17	kɔŋgɔ	akô	kɔla	kolákôla	kokôko	kwɛ
18	mɔŋgɔ	amô	mɔla	mɔlámôla	mɔmômɔ	mwe
20	gɔŋgɔ	agô	gɔla	golágôla	hogú păpɔ	gwɛ

指示形容詞①と③の声調は、所有形容詞の場合と同じく、先行する語にHがあればFL、先行する語にHがなければRLで現われる。①と③以外の指示形容詞は、常に表中に示した声調で現われる。

- míkɔŋgu dʒɛndze 「(話者のすぐ近くの) これらの木(4)」
 míkɔŋgu adʒê 「(話者からやや離れた) これらの木」
 míkɔŋgu dʒêla 「(話者から遠いが見えている) あれらの木」
 míkɔŋgu dʒɛládʒêla / míkɔŋgu dʒɛládʒɛ
 「(話者から遠いが見えている) あれらの木」

míkɔŋgu hedzǐ pápɔ	「ここにあるこれらの木」
míkɔŋgu dzwe	「(話題になっている) それらの木」
likɔnɔkɔnu lēnde	「(話者の手の上の) このかたつむり(5)」
likɔnɔkɔnu alê	「(話者の近くにいる) このかたつむり」
likɔnɔkɔnu lēla	「(遠いが見えている) あのかたつむり」
likɔnɔkɔnu lelálēla / likɔnɔkɔnu lelále	「(遠いが見えている) あのかたつむり」
likɔnɔkɔnu helí pápɔ	「ここにいるこのかたつむり」
likɔnɔkɔnu lwe	「(話題になっている) そのかたつむり」

指示形容詞④以外は、被修飾名詞を伴わずに独立指示代名詞としても機能する。

nahemala	sēndze	「私はこれ(7クラス)を買った」	
「私は買った」			
lolálo	ŋga	likólɔ	「あれ(5クラス)は洞窟ではない」
Neg		「洞窟(5)」	

4.2.3. 数

マテング語の数には名詞に属するものと数量形容詞に属するものがある。それぞれについては、名詞、数量形容詞のところすでに例をあげているが、ここでもう一度、マテング語の数についてまとめておくことにする。

1	-ímu	(数量形容詞)
2	-beli	(数量形容詞)
3	-tatu	(数量形容詞)
4	ŋsesi	(3クラス名詞)
5	ŋhanu	(3クラス名詞)
6	ŋhanu ná -mu	
7	ŋhanu ná -beli	
8	ŋhanu ná -tatu	
9	ŋhanu ná ŋsesi	

- 10 likomi límu (5クラス名詞)
 11 likomi límu ná pala -ímu
 20 mákomi gábeli (6クラス名詞)
 21 mákomi gábeli ná pala -ímu
 50 mákomi íjhanɔ
 52 mákomi íjhanu ná pala -beli
 54 mákomi íjhanu ná pala ísesi
 60 mákomi íjhanu ná pala (likomí) límu
 70 mákomí íjhanu ná pala (mákomi) gábeli
 90 mákomí íjhanu ná pala mákomi ísesi
 100 mákomi kômi

bana ábeli	「2人の子供」
mwana dʒwáka ábeli	「2番めの子供」 ¹⁴
misí íjhanɔ	「5つの集落」
musí gwa íjhanu na gûmu	「6番めの集落」

マテング語の数は5進法と10進法を組み合わせで表わされる。確認できたのは100までで、それ以上になるとスワヒリ語が用いられる¹⁵。1～3は数量形容詞である。被修飾語の名詞クラスに呼応して代名詞接頭辞をとる。単に数字を数える場合には、5－6クラス、あるいは9－10クラスに呼応する。4と5は3クラスに属する名詞である。6～9は、「5+1」、「5+2」のように表わされる。10を表わす-komiは5－6クラスに属する名詞で、10の位は「10×X」のごとく表わされる。

数を表わす語の声調は不規則的である。特に、大きい数字になると人によってかなりゆれが見られる。これはもともとあまり用いられていなかったためではないかと思われる。

¹⁴ただし、序数の例は、「かつての言い方」としてインフォーマントがあげた例である。現在では以下のようにスワヒリ語が用いられる。

mwana dʒwa píli	「2番めの子供」	(pili「2」<スワヒリ語)
musí gwa síta	「6番めの集落」	(síta「6」<スワヒリ語)

¹⁵数はスワヒリ語の影響を最も受けている領域のひとつである。100以下の数でも、現在はほとんどスワヒリ語が用いられる。比較的用いられているマテング語の数は5以下である。

4.2.4. その他の連体修飾語

少数であるが、被修飾名詞のクラスに関係なく5クラスの接辞をとるものがある。

10) limbúlu	「鈍い, 切れない」	kíponga limbúlu	「切れないかみそり(7)」
11) limbúndi	「尖っていない」	mpámba limbúndi	「尖ってないナイフ(3)」
12) lijáŋa	「反応がない」	dzimbwa lijáŋa	「反応がない犬(9/10)」
13) lípondu	「おとなしい」	mundu lípondu	「おとなしい人(1)」

位置的にも意味的にも形容詞のように見えるが、13の líponduが「かぼちゃ」を表わす5クラスの名詞と同形であることから、これらが名詞の並列である可能性もある。これらがつ接辞 li- が名詞クラス接頭辞であるのか、代名詞接頭辞であるのか区別がつかないが、いずれにしても被修飾名詞のクラスに影響されることなく保たれる。

4.2.5. 連体修飾語の順序

複数の修飾語によって名詞を修飾する場合には、連体修飾語は以下のような順序で被修飾名詞の後ろに現われる。

所有形容詞 + 形容詞 + 数・数量形容詞 + 指示形容詞 + 属辞

14) máhimbi	gáko	mákɔlɔŋgu	gábeli	agâ	gu	kúhemalesa
「ヤム芋(6)」	「君の(6)」	「大きい(6)」	「ふたつの(6)」	「あの(6)」	属辞(6)	不定形「売る」
「売り物のあのふたつの大きな君のヤム芋」						

4.3. まとめ

この章では、名詞と連体修飾語について、構造と文法呼応、声調を中心に示した。現象の中には、十分な分析ができていないものもあるが、全体像をつかむために、そのまま提示した。なお、関係節による名詞の修飾については、第6章「文の構造と種類」で述べることにして、ここでは扱わなかった。